良寛さま

相馬御風著

良寛さま

相馬御風著

實業之日本社版

良寛さま

みだし

お話

良寛さま……三
良寛さまと乞食……九
竹の子伸びろ……一三
良寛さまと犬……一五
晝間のあんどん……一九
こどもの好きな良寛さま……二五
月の兎……二九
そりかえり良寛さま……三六
良寛さまの習字……四一
盗人とお月さま……四四
なぐられた良寛さま……四七

天上大風……………………………………………五三
獸のまね……………………………………………五五
同じ道………………………………………………五九
なべぶたの額………………………………………六一
良寛さまと悪い坊さん……………………………六三
かくれんぼ…………………………………………六八
酒買い………………………………………………七三
半兵衛さんのおうち………………………………七七
良寛さまと雀………………………………………七九
石の地藏さま………………………………………八一
銭拾い………………………………………………八三
しらみの競走………………………………………八五
蚊と良寛さま………………………………………八七
父のかたみ…………………………………………八九
宗竜禪師と良寛さま………………………………九二

殿様のお使……………………九九
百年生きたい……………………一〇三
味噌貰い……………………一〇五
良寛さまの字……………………一〇八
すり鉢一つ……………………一一四
船頭の改心……………………一一五
籠の小鳥……………………一一九
いたずらがき……………………一二三
戸をおさえる……………………一二六
良寛さまと百姓……………………一二九
おしまい……………………一三四

童謡

しあん顔……………………一四一
良寛さまのいけどり……………………一四四

鉢の子忘れた……………………………………一四九
竹の子のびろ……………………………………一五三
かや釣り…………………………………………一五六
良寛さまのおひるね……………………………一五九
太鼓の音…………………………………………一六三
空に字を書く……………………………………一六七
日くれ道…………………………………………一七〇
冬ごもり…………………………………………一七四
まりひろい………………………………………一七七
鬼ごっこ…………………………………………一八〇

ふろく

良寛さまの歌……………………………………一八五

おはなし

おはなし

良寛さま

昔、越後の国に、良寛(りようかん)さまというえらい坊さまがありました。
越後の国で、昔から今までに一番えらかつた人は誰だと問いますと、誰でもそれは上杉謙信(けんしん)だと答えるでしよう。ところがこの頃になつて「その外にも一人ある、それは良寛さまだ。」という人がたくさんあるようになつて來ました。良寛さまのえらい事が、だんだんよくわかつて來たからです。

良寛さまは、今の出雲崎(いずもさき)という町の山本という立派な家に生れ、十八の年にその町の光照寺(こうしようじ)という禪宗(ぜんしゆう)のお寺で坊さまになりました。そして五年

の間そのお寺で勉強していましたが、二十二の年に備中の国の玉島という町に行き、そこの円通寺という大きなお寺で、国仙禅師というたいそうえらい坊さまのお弟子になつて、十年の永い間一しよけんめいで勉強をつゞけました。

良寛さまは学問もたいそうよくでき、字を書くにも、歌や詩を作るにも日本中でならぶ者が幾人もないだろうと思われるほどによくできました。その上に行いがそれは〱立派でした。本当に仏さまの教そつくりの行いというのはこういうのだろうと思われるほどに立派でした。

ですから良寛さまは、貰おうとさえ思えば、どんなえらい坊さまの位でも貰うようになれたし、またどんな大きな立派なお寺にでも住むことができたのでした。しかし、良寛さまはそんなものは少しも望みませんでした。

たゞもつと〳〵本当の学問がしたい、もつと〳〵立派な行いのできる人になりたい――それだけが良寛さまのたつた一つの望みでした。

それで、良寛さまは、とう〳〵何もかも捨てて乞食になりました。そして乞食をしながら、あちらこちらの国々を廻つて歩いて、行く先々でえらい坊さまをたずねては、いろ〳〵と教をうけ学問をつゞけました。

乞食をして廻るのですから、誰も夜とめてくれる人がなくて、野原の木のかげで寝たこともあります。どろぼうとまちがえられて、さん〴〵なぐられた後で、土の中に生埋にされかけたこともあります。誰も食べ物をくれる人がなくて、二日も三日も水ばかり飲んで歩きつゞけたこともありま す。それでも良寛さまは、少しもへこたれないで、あちらこちらとえらい坊さまをたずね廻つて、何年もの間学問をつゞけました。そしてしまいに

なつかしい故郷の越後の国に帰つて來ました。

越後の国に帰つて來てからも、良寛さまは大きな寺に住んだり、自分の生れた家に歸つて世話になつたりしないで、国上山といふ山の中の、五合庵というそまつな小屋に、一人ぼつちで住んでいました。

越後は冬は雪のたくさん積る国ですから、冬の間は良寛さまはどこへも出ることができないで、一人ぼつちで山の中に暮していました。そしてその間ひとりで毎日学問をしていました。

その代り永い冬が過ぎて、山の雪が消えはじめると、良寛さまはもうじつとしていることはできませんでした。春の野原を飛び廻る蝶々のように、良寛さまは山を下りて、毎日々々あちこちの村を托鉢して歩き廻りました。

托鉢というのは、お経をよみながら、家々から恵んでくれる物を貰つて歩

くことです。

何年も何年もそのようにして山の中に住んでいるうちに、良寛さまはいつの間にかおおぜいの人から敬(うやま)われ、慕(した)われるようになりました。

ほんとにえらい人は、どんなところにどんな貧しい暮しをしていても、いつかは世の中の人に知られて、うやまわれるようになるものです。良寛さまは、自分からは何一つじまんらしく見せびらかすようなことはしませんでしたが、いつの間にか「良寛さま！　良寛さま！」といつて、あつちからもこつちからも慕(した)われるようになりました。そして着物やたべ物なんかも、あちらからもこちらからも持つて來てくれますので、良寛さまは少しも困るようなことはありませんでした。

あちこちの村を歩き廻つているうちに、良寛さまは誰とでも仲のいゝ友

達になりました。どんなえらい人でも、どんなお金持でも、どんなつまらない人でも、どんな怖(おそ)ろしい人でも、どんな貧乏な人でも、良寛さまはみんな同じように親しく交わりました。そして良寛さまと交わっていますと、どんな人でもみんな同じように、心のやさしいゝ人になりました。

良寛さまはまた、草や木や鳥や獣(けもの)や虫なんかとも、たいそう仲よくなりました。みんな良寛さまのいゝ友達でした。花が咲けば、良寛さまは花と一しよに笑いました。鳥が鳴けば、良寛さまは鳥と一しよに樂しくうたいました。ですから、山の中に一人ぼっちで住んでいても、良寛さまは少しもさびしいと思いませんでした。

良寛さまと乞食

良寛さまは、仏さまのように立派な、えらい人でしたが、乞食と同じように貧乏でした。何もかも托鉢をして人から貰わなくては生きて行くことはできませんでした。

しかし、良寛さまは、たいそうなさけ深い方でありました。あちこちから貰うものでも、少しでもあまると、それはまずしい氣のどくな人たちにわけてやりました。

それは、ある年の、秋もおわりに近づいた、雨のふる寒い日の夕方のこ

とでした。あわれな一人の乞食が良寛さまのお堂に來て、何でもいゝから食べるものをめぐんでくださいといゝました。見ると、さむいのに、わらでこしらえたみの一枚でからだをつゝんでいるだけで、着物は一枚もきていないのでした。

　そのかわいそうなようすを見て、良寛さまは、たいそう気のどくに思いました。しかし、食べ物だけはやることができましたが、よぶんの着物なんかはありませんでしたから、良寛さまはこまつてしまいました。

　しかし、その人がきのどくできのどくでなりませんので、良寛さまは、とう〳〵自分の着ていた着物を一枚ぬいで、それを乞食にくれてやりました。乞食は、涙をながしてよろこびながら、またどこというあてもなく、出て行きました。

良寛さまは、その頃はもう、よほど年よつていました。その上、着物を一枚ぬいでしまつたのですから、そのさむさは一とおりではありませんでした。そこで、その晩は、良寛さまは早くからふとんの中に、もぐりこんでしまいました。

それでも、良寛さまは、じぶんの寒さなどよりも、ひるま立ちよつて行つた、乞食（こじき）の人のことばかりしんぱいしていました。

そして、

いずこにかたびねしつらむぬば玉の
よわのあらしのうたてさむきに

という歌をよみました。

その歌のいみはこうです。「ひるま、わしが着物をくれてやつたあの人は、

今ばんはどこでとまつたことであろう。今ごろはどうしていることであろう、このまあ夜なかの風の寒いのに。」
良寛さまは、えらい人であつた上に、それほどまでにしんせつな、なさけのふかい人でした。

竹の子のびろ

良寛さまの住んでいた五合庵(あん)のえんの下の土の中から、ある年の夏のはじめ頃、竹の子が二、三本頭をのぞかせました。そして、日一日と竹の子は伸(の)び上りました。

けれども、どこまでもまつすぐにのび〱と伸びようとした竹の子も、かわいそうに、とう〱えん板にあたまがつかえてしまいました。

それを、或日、何かのはずみに見つけた良寛さまは、

「おや〱これはまあかわいそうに！　おまえたちは、なぜまたこんなにくるしい目にあいながら、だまつていたのじや。」

と、まるで人間にものをいうように、その竹の子たちをいたわつてやりました。

良寛さまは、まずその竹の子たちの出ているあたりに敷いてあつたござをはぐり、それから一しよけんめいにえん板に穴をあけてやりました。そして竹の子のあたまをその穴からのぞかせてやりました。

「うん、よし〱。これでおまえたちも、ずん〱伸びることができよう。

さあ、さあ、えんりよなしにずん〳〵のびるのじやぞ。まつすぐにどこまでも伸びるがいゝ。おまえたちのあたまが、やねにぶつかるようになつたら、わしはまたやねに穴をあけてやる。いゝかね、すこしもしんぱいすることはない。ずん〳〵伸びるのじや。やれ〳〵、わしもこれでやつとあんしんしたわい。」

良寛さまは、こういつて、今えんの下から出してもらつたばかりの、その、うれしそうな竹の子のあたまを、いつまでも〳〵たのしそうにながめていました。

良寛さまと犬

それからまた、ある日のこと、良寛さまがごはんをたべていますと、どこから來たのか、一匹の犬がえんがわの下に坐つて、くびをのばして、良寛さまの方をじつと見ているのでした。

それを見ると、良寛さまは、

「おお、おお、かわいそうに、お前もたべたいのだろう。そうれ、やるぞよ。」

こうして、茶わんの中のご飯を、みんな、なげてしまいました。犬はよ

つぽどお腹（なか）がすいていたものと見えて、いきなりガクガクあごの骨をならしながら、たべました。

それを、うれしそうに見ながら、良寛さまは、ご飯のおかわりをもりました。そしてそれを食べようとすると、いつのまにかなげてもらつたご飯を食べてしまつた犬が、またしてもくびをのばして、じつと良寛さまの顔を見ているのです。

「おお、おお、かわいそうに。まだおまえは食べたりないのか。ほうれ、やるぞよ。」

こういつて良寛さまは、またしても茶（ちや）わんにもつたばかりのご飯を、のこらずなげてやりました。

犬はまた大いそぎで、ご飯をたべました。良寛さまは、またご飯のおかわ

、りをもりました。そして、前と同じように、それを食べようとすると、またしても犬がくびをのばして、ほしそうな顔で、こちらを見ているのでした。

良寛さまは、それを見ると、どうしてもまたご飯をなげてやらずにはいられないのでした。

こうして何ども何ども、同じことをくり返している間に、いつのまにか、おひつの中が空(から)になつてしまいました。

良寛さまは、はじめてそれに気がついて、

「おや、おや、これはしたり、お前のおかげで、わしの食べるごはんが、すつかりなくなつてしまつたわい。」

こういつて、杓子(しやくし)でおひつの底を、カンカンたたいて見せました。そし

て、
「犬の方がわしよりは、よつぽどりこうじや。アハハハハ……。」
と大きな声でわらいました。その声にびつくりして、犬はキヨトンとした顔つきで、良寛さまを見あげました。
　良寛さまは、やがて立ちあがつて、
「それにしても、わしもやつぱり、おなかがすいているのは同じじや。どりや一つ、これからご飯を食べさせてもらいに行くとしようかな。」
　こんなひとりごとをいいながら、縁から下におりて、草履（ぞうり）をはきました。
　ところが、それを見ると、犬はしつぽをふりながら、良寛さまの足もとに、よつて來るのでした。
「おお、おお、おまえはわしがすきになつたと見えるな。かわいいものじ

や。」

良寛さまは、こういつて、犬のあたまをなでてやり、おともにつれて、でかけました。

晝間のあんどん

良寛さまは、もと、越後の出雲崎（いずもざき）という町の山本という家の長男で、初（はじ）めの名を栄蔵（えいぞう）といいました、この山本という家は、たいそう古い家柄（いえがら）で、代々その町の名主役をつとめておりました。名主役というのは、今の町長とか村長というような役でした。

そういう立派な家に長男として生れ、その上十八歳の時に家の役であつた名主見習役にまでなりながら、どうしたわけかその年のうちに、その町の光照寺（こうしょうじ）というお寺でお坊さんになつたのが、良寛さまでした。良寛という名はその寺の和尚（おしょう）さまがつけてくださつたのです。

こどもの頃の良寛さまは、ちよつと見ると馬鹿のようであつたそうです。それで町の人たちから「名主さまの家の晝（ひる）あんどん息子（むすこ）」というあだなをつけられていたということです。「晝あんどん」というのは、晝間つけてあるあんどんですから、ぼんやりしているということなのです。今ならば「ひるでんとう」とでもいうのでしよう。

何でも、その栄蔵（良寛さまの初めの名）の八、九歳の頃のことでした。その頃栄蔵は一つの妙（みょう）な癖（くせ）がありました。それは人に叱られたりなんかする時に、へんな

目つきで叱つている人の顔を下から見上げることでした。栄藏のお父さんはしじゆうそれを気にしていましたので、ある日何かのことでひどく叱つたついでに、栄藏に向つていゝました。

「栄藏、お前はよくへんな目つきで人の顔を下から見上げる癖があるが、それはたいそうよくない癖だ。とりわけ、お父さんやお母さんの顔をそんな風ににらむのはわるいことだ。親の顔を下からにらむ子は、平目魚（ひらめ）になるというではないか。お前も気をつけてその癖をなおすようにしないと、しまいには平目魚になつてしまうぞ。」

栄藏はそれをじつと聞いていましたが、とう〳〵おい〳〵泣き出しました。そしてしばらくしてから、泣く〳〵家を出て行きました。

お父さんは栄藏のこうした様子を見て、始めのうちは「いゝあんばいに、

やつと自分の惡いことがわかつたと見えるわい。」とよろこんでいました
が、泣く〱家を出て行つた栄藏が、日がくれかけてきたのにまだ帰つて
來ないので、しまいには何となくそれが心配になつて來ました。

そこで、下男どもにいゝつけて、栄藏をさがしにやりました。しかし、どうしたのか、下男どもが町のどこをさがしても、栄藏の姿が見つかりませんでした。

それで、とう〱大さわぎになり、おおぜいの人達がそれ〲手わけをして、山の方をさがしたり、海の方をさがしたりしました。すると、海岸へさがしに行つた人たちの目に、思いがけなく、海の中へ突き出ている大きな岩の上に立つて、しょんぼりとしている栄藏に似(に)た姿(すがた)がうつつたのです。しかし、あんまりさわぎ立てては、かえつてよくなかろうというので、人

人はできるだけ足おとを立てないようにしてそのそばへ近よりました。見ると、それはやはりまがう方なき栄藏でした。しかし、栄藏は人々がこうして心配してさがしに來たのも知らずに、やはりぼんやりと岩の上に立つて海を見つめているのでした。

「まあ、栄藏さま、そんなとこで何しておいでなさるだ！」

人々はあまりのことにあきれて、栄藏の手をしつかりつかまえながら呼びかけました。

すると、栄藏はまるで夢からさめた時のように、ねぼけ顔をしながらふしぎそうに人々の顔を見てい丶ました。

「それじや、おれはまだ平目魚になつていないのかえ。」

しかし、ほかの人たちにはそれは何のことだか、少しもわかりませんで

したから、皆が大きな声でいゝました。
「栄藏さま、あんたは狐にでもだまされておんなさるのじやないかね。しつかりしなされ。のう、栄藏さま、しつかりしなされ。」
それを聞くと、栄藏は、初めて氣がついたように、答えました。
「さつき、うちのお父さんが、きさまのような目つきで親の顔をにらむ者は、しまいには平目魚になると、いゝなさつたから、おれはかなしくなつて海に來て、その平目魚というサカナになるのを待つていたんだ。それではまだおれは平目魚にはならないんだね。」
これには人々はすつかりあきれてしまいました。そして口には出さなかつたが、めいめい心の中でおもつたにちがいありません。
「まあ、何てばかな子だろう。」と。

しかし、このばかげた正直なところが、栄蔵のすぐれたところでした。栄蔵はこのようにして、町の人たちからはばかのように思われていましたが、学問は幼い時から一しよけんめいでした。近所のこどもたちまでがばかにして一しよにあそんでくれませんでしたから、栄蔵はかえつてそれを喜んで、いつもひとりぼつちで本を読んでばかりいました。そしてとうとうおしまいには、良寛さまというえらい坊さんになつたのです。

こどもの好きな良寛さま

良寛さまは何よりもこどもと遊ぶことが一番好きでした。たくはつの途

中、どこでも良寛さまはこどもたちと一しよに遊びました。てまりをついたり、オハジキをしたり、おにごつこをしたり、草の切り合いをしたりして、良寛さまはどこでゝも、こどもたちの仲のいゝ遊びともだちでした。

越後の国は冬になると雪がたくさんつもるので、良寛さまは冬のあいだは自分の山(やま)のおうちにひつこんで、本を読んだり、習字をしたり、歌や詩を作つたりしていましたが、春になつて雪がきえると、毎日あちこちの村や町にたくはつに出ました。そしてどの村のこどもたちも、どの町のこどもたちも、良寛さまの見えるのを待つているのでした。

　山寺の
和尚さんは
まりはつきたし

まりはなし
猫をかんぶくろに
ねじこんで
ポンとつきや
ニヤンとなく
ニヤンとなきや
ポンとつく
ポポンポンとつきや
ニヤニヤニヤンとなく
ポンニヤン、ポンニヤン。

良寛さまはこんな唄をうたいながら、こどもと一しよにおどり廻ること

もありました。また、

　つかんどりしよ
　わしやんどりしよ
　なつどの和尚さま
　石(いし)はらでころんで
　石がはらたつ
　和尚さま
　わらう、わらう。

こんなうたをこどもたちがうたつてはやすと、良寛さまはそれに合せておどつたり、ころんだり、わらつたりしてよろこんでいることもありました。

　良寛さまの袂(たもと)の中には、いつもてまりやオハジキをするための貝がらが

入れてありました。

良寛さまはまたとき〴〵、こどもたちを集めておもしろいお話をしてきかせました。そして、とりわけ良寛さまが自分でも好きで話してきかせたのは「月の兎」という印度の国の昔ばなしでした。

それはこういう話です。

月の兎

ずつと〳〵ずつとの大昔のことじや。あのお釈迦さまというえらいお方のおうまれあそばしたテンジクという国のな。その国のある山おくの林の

中にな、猿(さる)と兎と狐と——そうした三びきの獣(けだもの)が一しよにすんでおつた。
しかもその三びきのけだものは、一ぴき〱別なけだものではあつたがな、それでいて兄弟よりも仲よく暮しておつたのじや。
するとそのうわさがいつのまにか国ぢゆうにひろがつたというものだ。
「おい、おまえ聞いたか。何でもあの山おくの林の中に、猿と兎と狐が兄弟よりも仲ようして一しよに棲(す)んでおるということじや。同じ人間のなかまでさえケンカばつかりしておる世の中に、それはまたなんと感心なことではないか。」
つぎからつぎへとそういうような話がひろまつて行つたのじや。そうしてな、それがまたいつのまにか天においでになる神さまのお耳にまではいつたのじや。

神さまはそれをお聞きになつて、
「それはかんしんなことじや。それを一つためしてやろう。」
そこで、神さまは、天から地へと下りておいでになつた。しかし、神さまのお姿ではすぐにわかつてしまうというのでな、年よりの乞食の姿になられて、その林のところまで行きなさつた。そうして、おなかがすいて、今にも死にそうな苦しい様子をなされてな、その林の出口の石に腰かけておいでなされたのじや。
するとまもなく、そこへ猿と狐と兎とが、一しよに仲よう林から出て來た。乞食のすがたをなされた神さまは、それをごらんなされて、その三びきのけだものに向つておつしやられるには、
「どうかこのかわいそうな乞食をたすけてくだされ。わしは幾日も〳〵何

にもたべんので、今にも死にそうにくるしい。噂にきけば、お前さんたちは人間にもまさつて、情ぶかく、しんせつじやということだ。どうかこのあわれな私をも救つてくだされ。」

　これを聞くと三びきのけだものたちは、さつそく、「それは氣のどくなことだ。」とばかりに、猿は林へとんで行つていろ〳〵な木の実をたくさん集めて來て、その年よりの乞食にたべさせた。狐はまた川原へ行つて魚をたくさんとつて來てたべさせた。乞食は「おかげで命がたすかりました。」といつてよろこんだのじや。

　ところが、狐と猿とがそのようにしてくれているのに、兎だけはさつきからたゞもうあちこち飛び廻つているだけで、なんにもしてくれない。そこで乞食の姿をなされた神さまは、兎に向つておつしやられた。

「うさぎさん、お前さんも猿さんや狐さんと同じように、しんせつだと聞いていました。どうかお前さんも猿さんや狐さんと同じように、このあわれな私に何かめぐんでくだされぬか。たのみます。」

すると兎がいうには、

「はい、わたしだとて同じようにお前さんが気のどくでなりません。けれど、わたしには猿のような働きもできなければ、狐のようなちえもありません。わたしはこのとおり何もできぬバカな役たゝずのものでございますけれど、お前さんがそんなにいわつしやるなら……。」

こういつて、兎はしばらく何か考えこんでおつたが、急に何かおもいついたことがあると見えてな、きつとなつて猿に向つていつたのじや。

「猿よ、どうかお前は林から木の枯枝をたんと取つて來て、こゝに山のよ

うにつみあげてくれ。」
そこで、猿はさつそく林へ行つて、木のかれ枝をたくさんひろつてきて兎のいつたとおりにそこに山のようにつみ上げたのじや。それを見て兎はこんどは狐に向つていうことには、
「きつねよ、どうかお前は猿のつんだそのかれ枝の山に火をつけてくれ。」
狐も兎のたのむまゝに、そのかれ枝の山に火をつけた。火は見る〳〵うちにえん〳〵ともえ上つたのじや。兎はじつとその火のもえあがるのを見ていたがな、いきなりその火の中にとびこんでいうには、
「気のどくな旅のおじいさん、わたしはバカで働きがなくて、なんにもしてあげられません。どうか、せめてこのわたしの体の焼（や）けるのを待つて、このわたしの肉をたべてください。」

こうして、兎はわれとわが身を火の中へなげいれて、やかれて死んだのじや。

それを見ていなされた乞食の姿をした神さまはな、

「ああ、かわいそうな、しかし、えらい兎さんじや。いかになんでも、わしはこのような立派な心をもつたお方の肉なんかたべられようか。」

こうおつしやつて、泣く〳〵その焼けたゞれた兎の死がいをだきあげ、そのまゝもとの神さまのお姿におなりになつて、天へのぼつておいでになつた。そうしてその兎の死がいを月の御殿におまつりなされた。

それがその月の兎という話のもとじや。あの、それ、お月さまが出なさるたんびに、その中に兎のいるのが見える、その月の兎の、これが話のもとじや。

そりかえり良寛さま

ある日良寛さまは地藏堂（ちぞうどう）という町をたくはつして歩いていました。するとそれを見つけて、遠くからおおぜいのこどもたちが、われ先にとかけて來ました。そして良寛さまのうしろから声（こえ）をそろえて呼びました。

「良寛さま、一かん。」

それを聞くと良寛さまは、びつくりしたようにうしろにそりかえりました。

こどもたちはまた呼びました。

「良寛さま、二かん。」

良寛さまはもつとそりかえりました。

こどもたちはまた呼びました。

「良寛さま、三かん。」

良寛さまはなおそりかえりました。

「良寛さま、四かん。」

「良寛さま、五かん。」

「良寛さま、六かん。」

「良寛さま、七かん。」

「良寛さま、八かん。」

「良寛さま、九かん。」

「良寛さま、十かん。」

良寛さまはとう〳〵うしろへひつくりかえつてしまいました。それを見てこどもたちは手をたゝいてはやしました。

しかし、どうしたのか、良寛さまはひつくりかえつて地べたに倒れたま、いつまでたつても起き上りませんでした。

よろこびはしやいでいたこどもたちも、良寛さまのそのようすを見て、何だかきみがわるくなつて來ました。そして、こわごわみんなで良寛さまのそばによつて來ました。

と、とつぜん一人の子が、

「おや、良寛さまどうかしたぞ。」とさも〳〵びつくりしたように叫びました。

「ほんとだ、良寛さまが……。」と、ほかの一人の子もさけびました。
みんなが良寛さまのそばに寄つて來て、良寛さまの顔をのぞきこみました。良寛さまはぢべたに倒れたまゝ、目をつぶつていました。手も足も少しも動きませんでした。
「良寛さま！」
「良寛さま！」
「良寛さま！」
「りようーかーんさまー」
こどもたちは良寛さまの耳の近くへ口をよせて、かわるぐ〳〵一しようけんめいに呼びました。それでも良寛さまは目をとじたまゝ、少しもうごきませんでした。

「どうしよう！」

「良寛さまが死んだ！」

「りようーかーんさまー」

こどもたちはとう〱みんな声をそろえて泣き出してしまいました。

すると死んだと思つた良寛さまのお、め、め、がぱつちりとあき、につこりと笑つた良寛さまの顔が泣いていたこどもたちの目にうつりました。

「おや、良寛さまが生きなさつた。ほら、ほら、ほら〱〱〱。」

「ほんとだ。良寛さまが生きなさつた！」

「良寛さま！」

「良寛さま！」

「良寛さま！」

こどもたちはわれさきにと良寛さまに抱きつきました。

「アハハハハハ。かわいゝこどもたちじや。どりや〳〵、起きるとしようかの。」

こういつて良寛さまは起き上ろうとしました。こどもたちはみんなで良寛さまの手をひつぱつてあげました。

その日も良寛さまは、日の暮れるまでこどもたちと手毬をついたり、鬼ごつこをしたりして遊びました。

良寛さまの習字

良寛さまはたいそう字が上手でした。昔から日本ぢゅうに幾人もならぶ人がないほどに上手でした。

しかし、良寛さまは一生手習いをやめませんでした。たくはつの途中で休んでいる時なんかでも、良寛さまは棒切(ぼうきれ)や指で砂や土の上に字を書いたり消したりして習字をしました。

ある人が良寛さまに習字のしかたをたずねますと、良寛さまは、「いゝお手本で一しょけんめい習うがいゝ。それからお手本を習う時にはお手本の字ばかりを見て、自分の手もとを見てはいけない。そうすればきつといゝ字が書ける。」と教えました。

それからまた良寛さまは、その人に空中習字ということをも教えました。朝早く起きて口をすゝぎ、顔を洗つた後で、家の外に出る。そして朝の空

をながめる。朝の空をながめるのはきもちのいゝものだ。そのいゝ気持でこんどは空に向つて右の手をぐんと伸ばす。そして空一ぱいに大きな字を書く。空はかぎりなく広いから、どんな大きな字でも書ける。

そこで毎朝それをつゞけるのだ。「一」という字でも、「神」という字でも「仏（ほとけ）」という字でも、何でも自分の一番書きたいと思う字を、毎朝早く起きて何度も〳〵空一ぱいに大きく書くのだ。それが一等いゝ習字法だ。

こういうのが良寛さまの空中習字の法というのでした。良寛さまは毎朝それを何十年もつゞけました。そしてあのようにのびのびした立派な字が書けるようになりました。

盗人（ぬすびと）とお月さま

秋の月のいゝ夜のことでした。良寛さまのおうちにどろぼうがはいりました。

良寛さまは戸に錠（じよう）なんかつけておきませんでしたから、どろぼうはやすやすとはいることができました。

しかし、はいるのは何でもありませんでしたが、はいつても何一つ盗んで行くようなものがありませんでした。

良寛さまはどろぼうのはいつたことを知つていながら、だまつて蒲団（ふとん）を

かぶつて眠つたふりをしていました。

その様子を見て、どろぼうは良寛さまの着てねている蒲団をはぐりました。それでも良寛さまは平気で眠つたふりをしていました。

どろぼうはせめてこれでもと思つたらしく、その蒲団を持つて出て行きました。良寛さまは黙つてそれをどろぼうに持たせてやりました。

しかし、一枚しかない掛蒲団をとられてしまつたのですから、良寛さまは寒くて〱たまりません。しかたなしに良寛さまは、どろぼうの行つてしまつた後で、ガタ〱ふるえながら起きました。

すると、ちようど窓から美しい月の光が部屋一ぱいにさしこんでいるのでした。その窓にさした美しい月の光を見ると、良寛さまは寒いのも何も忘れてしまいました。

「何てまあい丶月だろう!・」

良寛さまはこういつて立ち上りました。そして窓の障子をあけて、ながいこと月の美しさに見とれていました。

「盗人にとりのこされし窓の月——ほんとにそうだ。いかなどろぼうでもこれまで持つては行けんわい。ありがたいことだ。」

良寛さまはしまいにはどろぼうのことなんか、まるで忘れてしまつて、たゞもうこうしてひとりで、美しい月を眺めていられることをよろこんでいました。

なぐられた良寛さま

これもある月のいゝ晩のことでした。

ある村の知つた人の家に泊めて貰つていた良寛さまは、夜ふけてから独で散歩に出かけました。その時良寛さまは坊主頭がさむいので、手拭で頬かむりをしていました。

道ばたの草には一めんに露がおりていました。そして月の光をうけて、うつくしく輝いていました。草のかげでは、あちらでもこちらでも、虫が鳴いていました。

良寛さまは空のお月さまを眺めたり、草原の美しい露の玉を見たり、いろ〳〵な虫のうたを聞いたりしながら、どこというあてもなく歩いて行きました。

と、いきなりうしろから、二人の男が、

「この野郎！」

と大きな声でどなつて、良寛さまの襟頸をひつつかんで地べたへころがしました。そしてさんざんに良寛さまを蹴つたり、なぐつたりしました。

良寛さまは何のことだかわからなかつたけれども、黙つて苦しさや、痛さをこらえながら、されるまゝにしていました。あんまり蹴つたりぶつたりされたので、何だか気がとおくなるような気さえしました。

二人の男はさんざん良寛さまをひどい目にあわせてから、

「おい、きさまだな、このあいだからちよく〳〵あつちこつちの畑の物を盗むのは。太い野郎だ。うむ、こら、面を見せろ、面を。」こういゝざま、良寛さまを引きずり起して頬かむりの手拭をはぎ取り、二人一しよに良寛さまの顔をのぞき込みました。良寛さまはやはり默つてされるまゝにしていました。

と、あかるい月の光で良寛さまの顔をはつきりと見た二人の男は、

「や、こりや、良寛さまじやないか。」

「良寛さまだ！」

こうさけんだかと思うと、二人ともあんまりびつくりしたので、まるで腰がぬけたようになつて、地べたに尻もちをついたまゝ、しばらくぼんやりしていました。

良寛さまは体（からだ）のあちこちを痛い目にあいましたが、さいわい怪我（けが）もしませんでしたから、そのまゝ立ち上つて帰ろうとしかけました。

それを見ると、二人の男はあわてて地べたにすわりなおつて、良寛さまの前に頭を下げました。そしていいました。

「良寛さま、どうぞかんべんしてください。わしらはこの村の者でございますが、この頃畑どろぼうがあつて困るので、こうして毎ばん畑の番をしておるのでございます。そこへちようどあなたが頬かむりなんかして畑の中をあちこち歩いておいでなされたので、ついいちずに畑どろぼうだと思い込んだために、あんなことになつてしまいました。どうぞゆるしてくださいませ。それにしても、あの時あなたが一ことわしは良寛だとおつしやつてくだされば、こんなことにはなりませなんだのに……ああ、ほんとに

悪いことをしてしまいました。どうぞかんべんなさつてくだされ。良寛さま、この通りおがみます。」

こういつて二人の男は、泣きながら手を合せて良寛さまを拝みました。けれども、良寛さまは少しも怒つてなんかいませんでした。少しもその人達をわるいとは思つていませんでした。そして、

「いや、わしがわるかつたのじや。夜おそく畑の中なんか歩いたりするもんじやでのう。」

良寛さまはこうやさしくいつて、そのまゝ帰つて行きました。二人の男はいつまでも涙を流しながら、良寛さまのうしろ姿を拝んでいました。

天上大風

ある時、良寛さまは三條（じよう）という町に、たくはつに行きました。

ところが、どうしたのか、あちらの家でも「良寛さま、上つてゆつくり遊んで行つてください。」こちらの家でも「良寛さま、どうぞまあお茶でもあがつて行つてください。」というふうに、どこへ行つても大事にされるのでした。

しかし、どこの家でも、上つて休んでいると、硯（すゞり）と筆と紙とを出して來て、

「良寛さま、今日はどうか一つ字を書いてください。」

と頼(たの)むのでした。

良寛さまはそれがいやで〳〵たまりませんでした。そして次から次へと逃げまわりました。

ところが、ある家の前を通ると、その店先のところに、五、六人のこどもが集つて、手に手に竹と紙とを持つて、しんけんに紙凧(たこ)をこしらえていました。

それを見ると、良寛さまはたまらなく面白くなりました。そしてその家の前に立つたまゝ、いつまでも〳〵それを見ていました。しかし、紙凧をこしらえるのにむちゆうになつているこどもたちは、そこに良寛さまという見物人のあることなんか少しも気がつきませんでした。

「かんしんなものじや、何でもあのようにしんけんであればいゝのだが。」

　こんなふうに感心しながら、良寛さまはその中の一人のこどもが大きな紙凧をこしらえ上げるまで見ていました。そして、その子がいよ〱自分の力でこしらえ上げた紙凧を、いかにも喜ばしそうに眺めているのを見ると、良寛さまは思わず声をかけました。

「おい、坊、わしにその紙凧に字を書かせてくれんかの。」

　こどもは驚いて良寛さまを見上げました。そして、

「おや、良寛さまだ！」

「ほんとだ！　良寛さまだ！」

「良寛さま、いつのまに來なさつた？！」

こういつてこどもたちは良寛さまのまわりに寄つて來ました。

　良寛さまは、やがてこどもの持つて來た硯と筆とを使つて、第一番にこ

どものこしらえた紙凧に

天上
大風
良寛書

と書いてやりました。

その紙凧は今でも三條の町に残つています。そして立派な掛物（かけもの）となつてある家の宝物（ほうもつ）となつています。

獣（けもの）のまね

ある日、良寛さまは、たくはつの途中日がくれたので、与板（よいた）という町の山田という家に泊めてもらいました。

ところが、良寛さまの泊めてもらつた部屋の床の間に、虎の絵の掛物が掛けてありました。

良寛（りようかん）さまはひとりでじつとその虎の絵を見ているうちに、自分も何だか虎になつたような気がしました。そして思わず畳（たゝみ）の上に四つんばいになり、絵にかいてある虎と同じようなかつこうをして、

「うー。」

とうなりました。

すると、何だか絵の虎も、

「うー。」

といつて、じつと自分を見ているような気がしました。
良寛さまはもう一度、
「うー。」
とうなりました。
絵の虎の方でも、また、
「うー。」
といつて、良寛さまの方へ近よつて來るように見えました。
良寛さまは、たいそうそれが面白くなつて來たので、何べんも何べんもそれをやりました。
そこへ、とつぜん、その家の女中さんがはいつて來ました。そしてそれを見てびつくりして、

「良寛さま、まあ、何をやっておいでなさる?」
と大きな声でいゝました。
良寛さまは驚いて、その虎のまねをやめましたが、いかにも恥かしそうに、
「お前さま、今の事を見たのかえ。ああ、そいつは困つた。だが、どうか家の人にはないしよにしといておくんなさい。そうでないと、みんなにへんに思われて困るでの。」
と頭をさげてたのみました。
女中さんは良寛さまのあんまり無邪気なのに驚いてしまいました。そして大わらいをしました。しかし、良寛さまがあんまりまじめなので、
「はい〳〵。誰にもいゝません。」

とかたく約束をしました。
　良寛さまは、
「やれ〳〵、それでわしも安心した。一体、この虎があんまりわしと一しよに遊びたいような顔つきをしていたもんだで。」
　こういつて、さすがに自分でも少しはおかしくなつたと見えて、
「アハハハハハ……」
と大きな声でわらいました。

同じ道

またある日のことでした。良寛さまは、たくはつの途中、ある小山の上に休みました。そして煙草（タバコ）をすいながら、しばらくあちこちの景色をながめていました。

　やがて、またそこから坂を下つて、下の村へとたくはつに出かけました。村端（むらはずれ）の家から次々に、一軒々々たくはつしてまわろうと思つて、村に入るとすぐに良寛さまは、鈴を鳴らし、お経をよみはじめました。

　ところが、道で逢つた村の爺（じい）さんが、

「おや、良寛さま、またたくはつに來なされたのう。ほんのさつきに來なされたばかりなのに。」

といゝました。

　そういわれて、良寛さまは初めて気がつきました。

「これはしたり、わしはまた同じ方へ下りて來てしまつた。山の上で休んであんまり景色がいゝので、それに見とれておつたもんだから、ついうつかりしてまたさつき上つたと同じ方の坂を下りて來てしまつたわい。馬鹿なことをしたもんじや。アハハハハ。」

良寛さまはこういつて、自分ながらあんまりおかしいので、大笑いをしました。そしてまたあと戻りをして、坂道をのぼつて行きました。

なべぶたの額

越後西蒲原郡牧ケ花村の解良という家に、大きななべのふたに「心月輪」

という良寛さまの書いた字を彫つた額が、今でもかけてあります。そのなべぶたには大きなひゞが入つており、たいそう古びてまつくろになつています。

それはある時良寛さまがその家に行つた時に、われて使えなくなつた木のなべぶたを見て、それをそのまゝ捨ててしまうのがもつたいないと思い、「なべぶたとして使えなくなつたとて、このまゝ捨ててしまうのはかわいそうだ。これでもこしらえるには、どんなに骨が折れたことかわからぬ。どりや〳〵、わしも一つこのなべぶたを出世させてやろう。位を高くしてやるのじや。」

こういつて良寛さまは、そのこわれたなべのふたに「心月輪」という字を書き「良寛書」と自分の名まで添えてやりました。

そうなると、その家の人達は、それを捨てるどころか、「これこそ家の宝だ」というので、良寛さまの書いた字を彫りつけて、そのまゝ額として壁の上にかけることにしたのでした。

つまり良寛さまの徳のおかげで、そのわれたなべのふたが、捨てられて薪の代りにでもされる代りに、家の宝にまで出世したのでした。

良寛さまと悪い坊さん

やはり同じ解良という家でのことです。

ある日、良寛さまが、その家に泊つていますと、その近所の寺にいる智

海という坊さんがひどく酒に醉つぱらつてたずねて來ました。

この智海という坊さんは、少し気がちがつていて、世の中に自分ほどえらい坊さんはないと思つているのでした。そしてどんなにえらい坊さんでも、みんな自分にくらべると馬鹿な奴ばかりだと威張つているのでした。

ところが、誰一人その坊さんをえらいとなんか思う者はありません。それどころか、「あいつはきちがい坊主だ〳〵。」といつて、誰も相手にするものがないのです。

それにひきかえ、良寛さまは、自分では「わしは馬鹿じや〳〵。」といつて、どんな人の前にでも丁寧に、やさしくしているのに、ほかの人たちみんなが「良寛さまはえらい、良寛さまはえらい。」と敬つているのでした。

それで、智海坊の方では、日ごろから良寛さまがにくくて〳〵仕方がな

いのです。

「あんな乞食坊主のくそ坊主、どこがえらいのだ。おれの目から見れば、あんなやつはまるでうじ虫も同然だ。いつか一度あいつをひどい目にあわせてやろう。」

智海坊は前からそう思つて、いゝ時をねらつておりました。

ところが、ちようどうまく、その日良寛さまが解良家に來ていることを知りましたので、智海坊はうんとこさと酒を飲んでやつて來たのでした。

「おい、良寛いるか。」

ぐでん〳〵に醉つぱらつた智海坊は、こう表からどなつて入つて來ました。そして、良寛さまの姿を見るや否や、泥まみれになつた自分の帶を解いて、それで良寛さまを打とうと飛びかゝりました。

しかし、良寛さまの方では、何のことやらさつぱりわからないので、默ってそれを見ていて、逃げようとも、かくれようともしませんでした。

智海坊はます〳〵つけ上つて、今にも良寛さまをぶちのめしそうなけんまくでせめよりました。

しかし、家の人たちは、それを見かねて、あわてて智海坊をとりおさえ良寛さまを奥の座敷へつれて行きました。

良寛さまの方では、一こう平気でした。あれほどらんぼうなことをされていながら、少しも智海坊をにくんでいる様子なんかありませんでした。

「なか〳〵げんきのいゝ坊さんじや。よつぽどたくさん飲んだと見えるわい。みんなあれは酒がさせているのだ。あの人にはわるい気なんかないのだろうが……。」

こんなことをひとりぶつ〳〵いゝながら、良寛さまは座敷（ざしき）のまん中に、坐禪（ざぜん）をしていました。そして智海坊の方がどうなつたかなんてことは、いつのまにか忘れてしまいました。

すると、しばらくたつてから、急にひどい雨が降つて來ました。そのひどい雨の音を聞きつけると、良寛さまはあわてて立ち上つて、茶の間へと出て來ました。そして、家の人にたずねました。

「ひどい雨が降つて來たが、さつきの坊さんは雨具を持つておつたろうか。さぞ困つとるのではなかろうかの。」

これを聞いた家の人たちは、良寛さまをます〳〵えらく思いました。

「何というえらいお方だろう。あの気ちがい坊主があんな無礼を働いたのを、少しも気にかけていなさらぬだけでも、なか〳〵あたりまえの人間の

できることではないのに、雨が降つて來たといつて、さつきのことなんか少しもなかつたというふうに、かえつてあの坊主のことを心配していなさる。まつたく、何てえらいお方だろう。まるで仏さまそつくりのお心を持つておいでになるようだ。」

人たちはこんなことを話し合つて、いつそう良寛さまを敬うようになりました。

かくれんぼ

ある日、良寛さまがある村を通りますと、五、六人の子供たちが集つて

かくれんぼをしていました。そして良寛さまを見ると、みんながそばに寄つて來て、良寛さまにも仲間になれとすゝめました。良寛さまは喜んでかくれんぼの仲間入りをしました。

「ジヤンケンポンヨ。」

「ジヤンケンポンヨ。」

「ジヤンケンポンヨ。」

三度目にやつと勝負がついて鬼がきまりました。鬼は道ばたの木の幹に、目をふさぎ顔をおしつけて立つていました。

ほかの者はてんでにいゝかくれ場所をさがしました。良寛さまは独だけその近くにあつたまき小屋の中にかくれました。そしておころもの袖を頭にかぶつてじつと息をこらしていました。

ところが、その間にこつそりこどもたちが集つて、相談をしました。

「おい、良寛さまをあのまゝにしておいて、みんなで逃げちまおう。そうしたら、良寛さまどうするだろうな。」

「おもしろい〳〵。」

「逃げよう〳〵。」

こんなわるい相談をして、こどもたちはみんな逃げてしまいました。しかし、良寛さまはそんなこととは知らずに、そのまゝいつまでもかくれていました。

すると、とつぜん、そこへ誰かはいつて來ました。そして、

「おや、誰だい、そこにいるのは?!」と大きな声でいゝました。

良寛さまはびつくりして袖の下から顔を出してその方を見ました。それ

はその家のおかみさんがまきを出しに來たのでした。
「おや、良寛さまじやございませんか。まあ、あなたは、そんなところに何をしておいでなされます。」
おかみさんはさも／＼不思議そうにたずねました。それを聞くと良寛さまは、あわてて手をふつて、
「そんな大きな声を出しなさんな。鬼にわかつてしまうじやないか。」と小さい声でいうのでした。
おかみさんはその様子を見ると、おかしくて／＼たまらんというように笑い出しました。そしていゝました。
「まあ、良寛さま、鬼なんてもうおりません。こどもたちはみんなさつきどこかへ行つてしまいました。あなたはまあ何て正直なお方でしよう。あ

れからずつとこゝにかくれていなさいましたか。」

良寛さまはそれにはあつけにとられてしまいました。そしてさも恥かしそうにしてまき小屋から出て行きました。

酒買い

ある日、江戸の有名な学者で亀田鵬斎（かめだほうさい）という人が、良寛さまのおうちにたずねて來ました。

鵬斎は幾月も前から越後の国に來て、あちらこちらへ招かれて、学問を教えたり、字や絵を書いたりしているのでした。そしてあちこちで良寛さ

まのえらい人だということを聞いていた上に、二、三度良寛さまにあつて、ます〳〵そのえらいことがわかつていましたので、わざ〳〵こうして遠いところまで訪ねて來たのでした。

良寛さまも大そうよろこびました。そして二人ぎりで、日の暮れかゝるまでも詩や歌や学問の話をしつゞけました。

鵬斎という人はたいそうお酒が好きでした。良寛さまもお酒はかなり好きでした。そこで、夕ぐれ近くなると、良寛さまはいゝました。

「せつかくこんなところまで訪ねて來てくださつたのに、酒がのうてはさびしい。わしはこれから村まで酒を買いに行つて來ます。どうぞしばらくおひとりで待つていてください。」

やがて、良寛さまはたなにのせてあつたとくりをぶらさげて出て行きま

した。

鵬斎は、こんな人里はなれたさびしいところに独でいるのは困ると思いましたが、何より好きな酒が來るというのですから、さびしいのを我慢して独で留守をしていました。

しかし、どうしたのか良寛さまは一時間たつても、二時間たつても帰つて來ませんでした。あたりが暗くなつて來ました。風が寒くなつて來ました。鵬斎はもうがまんができないほどさびしくなり、それに良寛さまのことがひどく心配になつて來ました。

鵬斎は、とう〳〵たまらなくなつて、外へ出ました。そして良寛さまの行つた方の坂道を下りて行きました。

しばらく歩いて行くと、そこに大そう見はらしのいゝところがあつて、

大きな松の木が一本立つていました。驚いたことには、良寛さまがその松の木の根に腰かけて、休んでいるのでした。

鵬斎は急に嬉しくなつてそのそばへかけ寄りました。そしていゝました。

「良寛さま、今お帰りですか。私はあんまりおそいので心配のあまりお迎えに出て來ました。」

それを聞くと、良寛さまはびつくりして振りかえり、

「や、あなたでしたか。いゝところにおいでになつた。どうです、あの月は！」こういつて、東の空に浮んでいる美しい月を指しました。

鵬斎もそういわれるまゝにそのまんまるな月を眺めました。いかにもそれは美しい月でした。しかし、先ほどから待ちくたびれていた鵬斎は、何となくものたりない気がしました。そこで良寛さまに向つていゝました。

「それはそうと、良寛さま、お酒はどうなりました。もう買つておいでになつたんですか。」

ぼんやり月を眺めていた良寛さまは、それを聞くとびつくりして立ち上りました。そして坊主頭をかきながら、

「いや、大変だ。わしはそれをすつかり忘れていましたわい。実はさつきこゝまで來ると、ちようど月が上るところで、それが何ともいえず美しかつたので、ついこゝで今まで見ていましたのさ。いやとんでもないことをしてしまいました。それでは大いそぎでこれから行つて買つて來ましよう。」

こういうが早いか良寛さまは、そばにころがしてあつたとくりを取り上げてあわてて坂道をかけ下りて行きました。

鵬斎は、あつけにとられて、ぼんやりそのうしろ姿を見ていました。

半兵衛さんのおうち

良寛さまは、ある日、ある村へたくはつに行きました。
そしてある家の前に立つていますと、そこにいた人が、
「良寛さま、これは半兵衛さんのうちだ。」とい丶ました。
それを聞くと、良寛さまはあわてて逃げました。そしてまたほかの家の前に立ちました。
すると、また、そこにいた人が、
「良寛さま、それは半兵衛さんのうちだ。」とい丶ました。

良寛さまはまたこそ〳〵逃げました。そしてまたほかの家の前に立ちました。すると、また、そこにいた人が、

「良寛さま、それは半兵衛さんのうちだ。」といゝました。

良寛さまはまたすた〳〵逃げました。

こうして良寛さまは何軒もの家の前に立ちましたが、どの家も〳〵半兵衛の家だというので、とう〳〵何も貰わずに、その村を逃げ出してしまいました。

それは、良寛さまがいつか半兵衛というらんぼうな男にひどい目にあつたことがあつて、それから半兵衛とさえいえば良寛さまはたいそうこわがつていたのでした。それをその村の人が知つていて、良寛さまをだまして見たのでした。

しかし、うそをつくということをしたことのない良寛さまは、ほかの人もうそをつかないものと信じていました。ですから、半兵衛という家が同じ村にそんなにたくさんあるわけがないのに、やはり人のいうとおりそれをほんとだと思つているのでした。

だました人たちも、良寛さまのあんまり正直なのにかんしんして、そんな正直なお方をだましたのはわるかつたと、たいそうこうかいしました。

良寛さまと雀

良寛さまが、たくはつして貰つたお米を、鉢(はち)の子に入れて持つて帰る途

中、よく雀がとんで來て、その鉢の子にとまつては、お米を食べさせて貰うことがありました。

しかし、良寛さまは雀を追うことなんかしませんでした。雀の方でも少しも良寛さまをこわがりませんでした。そして良寛さまの手にとまつたり肩にとまつたり、また手に持つた鉢の子にとまつたりして、よろこんでいました。

ある日、良寛さまは、道ばたに咲いていたすみれの花をつんでいるうちに、お米の一杯はいつた鉢の子をそこに置き忘れました。

しばらく歩いてからふとそれに気がついて戻つて來ますと、一人の男が、

「良寛さま、これあなたのでしよう。」といつて持つて來てくれました。

しかし、その中にあつたお米も、銭もなくなつていました。それでも良

寛さまは少しもそんなことは考えず、

「おゝ、あつたか〳〵。ありがとう〳〵。」といつて、その空の鉢の子を抱くようにしてよろこんで帰つて行きました。

石の地藏さま

良寛さまは、ある日、たくはつの途中田甫中の道で雨にあいました。困つたと思つて、あたりを見まわしますと、その近くに大きな笠をかぶつた石の地藏さんが立つていました。良寛さまは、さつそく、その石の地藏さんのところへ行つて、

「地藏さん〳〵、どうぞわしも仲間にしてください。」といつて、地藏さんのかぶつた笠のかげへ頭だけ入れさせて貰いました。

しばらく、そうしていますと、そこへちようどその近くの村の知人（しりびと）が通りかかりました。そして良寛さまを自分のうちへ連（つ）れて行つて、きものをかわかしてくれました。

その家の人たちは、前から良寛さまに字を書いてもらいたいと思つていたので、それを良寛さまにたのみました。良寛さまは頭をかき〳〵筆を取り上げて、「いろはにほへと」を十二枚書いてやりました。

銭（ぜに）拾い

良寛さまはある人から、道に銭（ぜに）の落ちているのを拾つた時は、たいそううれしいものだということを聞きました。

ある日、たくはつの帰り道で、良寛さまは今日こそそのことを試（ため）して見ようと思つて、貰つて來た銭を道の上へ落して、それを拾つて見ました。

しかし、落してはひろい、おとしてはひろい、何十ぺんやつて見ても、ちつともうれしくはありませんでした。

「どうしてこんなことがおもしろいのだろう。まさかあの人がうそをいつ

たのではなかろうに。」

こんなことをいゝながら、良寛さまは、今うれしくなるか、今うれしくなるかと思つて、何百ぺんもやつて見ましたが、やはりちつともうれしくなりませんでした。

が、そんなことをしているうちに、投げ出した銭が草はらの中に入つて見えなくなりました。良寛さまは「こいつはしまつた！」と思つて、しんけんに草の中をさがしました。そしてやつとのことで銭が見つかりますと良寛さまはおもわず、

「やれ、うれしや。」といゝました。

そしてその銭をもとの通り鉢の子の中に入れてから、良寛さまは、

「やつぱりあの人のいつたことはほんとうだつた。やつぱりあの人はうそ

をいう人ではなかつた。」といつて、自分にそれをいつてきかせた人の正直なのに安心しました。

しらみの競走

良寛さまの着物には、よくしらみがたかりました。しかし、良寛さまは平気でした。

時々良寛さまは、たいくつになると、着物にいるしらみをとつて、それを何匹(なんびき)も〳〵紙の上にはわして、眺めたのしむのでした。

しらみは紙の上をあちこちはいまわります。足のはやいしらみもあれば

のろ〳〵しているしらみもありました。良寛さまは何匹ものしらみに徒歩競走をさせておもしろがりました。

こんな風に、さんざんしらみを遊ばせてから、良寛さまはそれをまた一匹一匹つかまえては、自分の着物につけました。のみでもしらみでも、良寛さまは一匹も殺したことがないのでした。

ある時、良寛さまは考えました。

「もしわしの着物にいるしらみやのみが、松虫や鈴虫のようにいゝ声で鳴く虫だつたら、わしのふところの中はどんなに賑やかだろう。まるで武蔵野の原のようだろうな。」

そこで良寛さまはそのことを歌につくつて見ました。

のみしらみ音に鳴く秋の虫ならば

わがふところは武蔵野の原

そして、

「なるほどこれはおもしろい考じや、アハハハハ。」と自分で自分の歌をおもしろがつて、時々それをうたつてはよろこんでいました。

蚊と良寛さま

良寛さまのおうちには、蚊帳がありませんでした。良寛さまはのみやしらみに食われても平気でしたが、蚊にはへいこうでした。

しかし、蚊やり火をたいて蚊を殺したり追うたりすることは、良寛さま

にはできませんでした。
　ところが、良寛さまはある百姓家に行きました時、その家の馬小屋の中に、わらをたばねたのをなわでつるしてあるのを見て、「これは何だろう。」とたずねますと、その家の人はそれは馬が体をそれでこすつて蚊を追うためにしてあるのだと教えてくれました。
　良寛さまは、なるほどこれはうまいしかけだと思いました。そしておうちに帰るなり、さつそく、その通りわらの束（たば）をこしらえて、それをなわで天井からつるしました。
「うん、なるほど、これはうまい考えじや。」
　良寛さまはこういつて、それをこしらえてからは、蚊が坊主あたまにたくさんとまると、わざわざ立つて行つてそれにあたまをぶつけて蚊を追い

ました。

父のかたみ

良寛さまのお父さんは、山本左門泰雄といつて、たいそう学問のあるえらい人でしたが、六十の年に京都でなくなりました。

良寛さまはそのお父さんの書いた掛物を壁にかけて、死ぬ日まで毎日毎日それを拝んでいました。それには、

朝ぎりに一段ひくし合歓の花、以南

と書いてありました。以南というのは、良寛さまのお父さんの別の名でし

た。良寛さまは、その掛物のすみに小さく、

水茎の跡は涙にかすみけりありし昔のことをおもえば

という歌を書き添えました。それは昔のことを思うと涙が出て來て懐しいお父さんの字さえよくよめないという意味です。

また良寛さまのは、お父さんのその発句を読んで

朝ぎりの中に君ますものならば
はるゝまに〳〵うれしからまし

という昔の人の詠んだ歌も書きました。

それはお父さんの発句にある、朝霧の中に咲いているねむの花のように若しお父さんも霧の中にかくれておいでになるのならば、霧がはれる度にお父さんにもあうことができてどんなにうれしいことだろう、けれどもお

父さんは霧の中においでになるのでなくて、死んでなくなつておしまいになつたのだ——こういうような悲しいおもいをあらわすために、書かれたのでした。

良寛さまはそれほど孝心のふかい人でした。また良寛さまの歌に、

たらちねの母がみ国と朝夕に
佐渡が島べをうち見つるかも

というのがあります。

良寛さまのお母さまは佐渡の国の人でした。この歌はお母さまの亡くなつた後、

「あゝ、あそこがお母さまのお生れになつた佐渡が島だ。お母さまがもつと生きていてくださつたら……」というような悲しい気持で、朝に晩に佐

渡が島をながめては、なくなつたお母さんを思つていたということを詠んだのです。これだけを見ても、良寛さまがどんなにお母さまにも孝行であつたかということがよくわかります。

宗竜禅師と良寛さま

これは良寛さまが諸国を旅行し、行く先々でえらい坊さんにあつて教をうけていた間の話です。

あるところの大きな寺に、宗竜禅師というえらい坊さんがありました。良寛さまはぜひ何とかして一度そういうえらい人にあつて教をうけたいも

のだと思つて、その寺へたずねて行きました。
　しかし、宗竜禪師はその頃（ころ）はその寺にはいないで、別の建物の中に住んでおいでになりました。そしてめつたに人にあわないようにしておいでになりましたので、良寛さまがその寺の坊さん達に頼んで見ましたけれどもどうしても取次いでくれようとしませんでした。
　しかし、良寛さまはせつかくはる〴〵たずねて來たのですから、どんなことをしても宗竜禪師にあわぬうちは引返すまいと決心して、幾日も〳〵その寺に泊めて貰つていました。それでも誰一人良寛さまを取次いでくれようという人はありませんでした。
　そこで、良寛さまは考えました。
「これは取次ぎを頼んでお目にかゝろうとしているのでは、いつまでおつ

てもだめにきまつている。いつそ思い切つてじかにお願いして見ることにしよう。

そう思つて、良寛さまは自分の願いを紙に書き、ある晩こつそりと寺をぬけ出し、宗竜禪師のおいでになるという別の建物の裏の方へ廻(まわ)つて見ました。

ところが、そこには高いへいがあつてとても越えられそうもありません。良寛さまはどうしようかと思案(しあん)しながら、あちこち見廻つて見ました。

すると、ちようどうまいぐあいに、庭の松の木の枝が、塀を乗り越(こ)して外まで伸びているところがありました。それを見ると、良寛さまはたまらなくなつて、その枝に飛(と)びつき、泥坊(どろぼう)かなんかのように、する〳〵とへいを越えました。

しかし、庭の中へうまくはいれはしたものの、どこもかも雨戸がしつかり締めてあつて、のぞいて見ることすらできないのでした。良寛さまはがつかりしてしまいました。

それにしても、せつかくこれまで苦心して來て、このまゝ何もせずに引返してしまうのは、残念でなりません。良寛さまはいろ〳〵考えました末に、雨戸の外にあつた手水鉢を見つけて、そのそばへ忍びよりました。

「うん、これはいゝものがある。朝になればきつと禪師さまがこゝで手をお洗いになるにきまつている。その時にこの手紙が禪師さまの目にとまれば、それできつとうまく行くに相違ない。そうだ〳〵。」

良寛さまはこう考えつくと、さつそく、書いて來たお願いの手紙を懐から出して、それを手水鉢のふたの上に置きました。そしてあわててそこか

ら引返しました。

　が、塀のところまで來てから、良寛さまはふと気がつきました。

「いや、待てよ。あの紙きれをあのまゝにして置いただけでは、もし風でも吹いて來ると吹き飛ばされてしまう。うん、そうだ。」

　良寛さまは再び手水鉢のところまで戻つて行きました。そして石を一つ拾い上げて、その上にのせました。

「これで大丈夫。」

　良寛さまは初めてにつこりと笑いました。そしてぐず〱していて誰かに見つけられでもしたら大変だとばかりに、大急ぎでその場を逃げ出し、再び塀を乗り越えて寺に戻りました。

　じきに夜が明けて朝となりました。毎朝して來たように、その朝も良寛

さまは皆と一緒にお堂に出て、朝のおつとめをしました。

ところが、その朝のおつとめの最中のことでした。お堂から宗竜禪師のおいでになる建物へつゞいている廊下に、おもいがけなく、「良寛という人がいるか。もしいたら、すぐに禪師さまのところに來なさい。」という声が聞えました。

おおぜいの坊さん達は、皆驚いてその方を見ました。良寛さまもびつくりしました。しかし、うれしくて〳〵おどり上りたいような気がしました。

こうして、良寛さまは一念がとゞいて宗竜禪師にあうことができ、またいろ〳〵と教えをうけることができるようになりました。

「禪師さま、私は実は禪師さまにお目にかゝつてお教を受けたいばつかりに、あんなことまでいたしましたが、どんなおとがめをうけるかと思つて、

心配でなりませんでした。」と良寛さまはおそる申しました。しかし、

「なるほどお前がしたことはよくないことであつたかも知れない。ことによつたら泥坊とまちがえられてひどい目にあつたかも知れない。けれども、それほどあぶないことをしても、このわしにあつて教を受けたいというお前のしんけんな心がけにわしは感心したのじや。」こういつて、禪師はかえつて良寛さまをおほめになりました。

良寛さまは、乞食をしながら、何年も何年もあちこちの国々を廻つて歩いて、そうしたえらい人にあつて教を受けました。

殿様のお使(つかい)

良寛さまがえらい坊さんだということについて、いろ〳〵と家來どものの話を聞いて感心したある殿さまが、そんなえらい坊さんをどうかして自分のお城の近くに連れて來て、時々ためになる話を聞くことができたらどんなに幸福だろうと思いました。

そこで、ある日一番上の家來を呼んで、殿さまがいゝました。

「どうじや、その良寛という坊さんのために、城の近くに大きな寺を建てようではないか。そして時々わしもお前達もその方の教えをうけることにし

たらどんなにいゝか知れない。お前これからその坊さんのところへ行つて、わしがそういう望みを持つているということを伝えて見てくれないか。」
家來もそれをたいそう嬉しく思いまして、早速良寛さまのところへ行くことにしました。しかし、とつぜん行つても良寛さまがいないかもわからぬし、それにあんまりだしぬけではめいわくでもあろうと思つたので、殿さまの家來はまずそのことを良寛さまのいる村の庄屋へいつてやつて、様子を知らせて貰うことにしました。

それを聞いた村の庄屋は驚きました。殿さまの一番上の御家來がしかも殿さまのお使としてこの村にやつて來る――それは全く大変なことでした
庄屋はさつそくおいでを願う日取をして返事を申し送りました。そして村の者をおおぜい呼び集めて、良寛さまの留守の間に、まず第一に良寛さま

の庵や庭をきれいに掃除させました。

幾日も〳〵あちこち托鉢をしたり、こどもと遊んだりして歩き廻つていた良寛さまは帰つて來てその様子を見てびつくりしました。そして、

「あゝ、困つたことをしてくれたわい。こんなに庭の草をむしつてしまつては、せつかくゆうべまで鳴いていた虫もみんな逃げてしまつたであろう。」

こういつて良寛さまは悲しみました。

やがて村の庄屋の案内で、殿様の一番えらい家來の人がたずねて來ました。そしていろ〳〵と殿様からの言葉を伝えました。しかし、良寛さまは何も返事をしないで、一枚の紙にこんな発句を書いて差出しました。

焚くだけは風がもて來る落葉かな

これは自分で作つたのではありませんが、面白い発句だと思つておぼえて

いたのを書いたのでした。

「私はそんなえらい殿様の師匠（ししよう）になつたり、大きな寺を建てて貰つたり、そんなことはして貰わなくてもいゝ。この山の中の粗末な庵（いおり）にいて、いるものがあつたらたゞいゝはつゝに出て貰う、あいたい人があつたらあいに行く、そして行く先々でこどもたちとたのしく遊ぶ、こういう気樂なくらしが一番いゝ。わしは出世がしたくて学問をしたのではない。学問がしたくて学問をしているのだ。わしから何か教わりたい人があつたら自分で出かけて來るがいゝ。」

良寛さまはそういうようなことは何もいゝませんでしたが、その発句の中にはそういうようないろ〳〵な意味がふくまれているのでした。

これには殿様の一番えらい家來の人も閉口（へいこう）してしまいました。そしてそ

のまゝすご〳〵と帰つて行きました。

百年生きたい

あるお金持のおじいさんが、ある時良寛さまのところに來ていゝました。
「良寛さま、私はお金もこれでもうほしくありませんし、何をしたいということもありませんが、たゞ一つどうしても私の力ではだめなことがあります。それをもしあなた様から教えていたゞければと思つてまいりました。」
「ほう、それはまたどんなことを。」と良寛さまは問いかえしました。
「実は私は今八十ですが、どうかして百まで生きていたいと思います。そ

れについて何かいゝことがありましたら教えていたゞきたいのです。」とおじいさんがたずねました。

するど良寛さまは、何を思つてか、

「アハハハハ……。」

と大きな声で笑いました。そして、

「なあんだ、それくらいなことなら、何でもありませんわい。」と平気でいいました。

おじいさんはたいそう喜びました。そして前へ乗り出すようにして、良寛さまがその百年生きる法を教えてくれるのを待ちました。

良寛さまはにこ〳〵顔でいゝました。

「もう百生きたとおもえば、それで百生きたことになるじゃありませんか。

そう思つてさえおれば、一日生きりや一日もうかつたわけだし、また一日生きりやまた一日もうかつたことになる。こんなうまいことはありますまい。」

おじいさんはそういう良寛さまの教えをうけて、はじめて自分があんまり慾の深かつたことを悟りました。そしてそれからはその日その日を樂しく送るようになりました。

味噌貰い

ある日、良寛さまは、たくはつから歸つて來ました。そして貰つて來た

お米で、雑炊(ぞうすい)をして食べようと思いましたが、あいにく味噌(みそ)がありませんでした。

良寛さまは、「困つたなあ。」と思いながら、味噌を入れるかめの底(そこ)を杓子(しやくし)でカン〳〵叩(たゝ)いていました。そこへちようどうまく村のこどもが三人あそびに來ましたので、良寛さまはさつそく手紙を書いてこども達にたのみました。

「おい、お前たち、この手紙を持つて行つて、どこかから味噌を貰つて來てくれないか。」

しかし、こどもたちは困りました。そして、

「どこかからつて、良寛さま、そのどこかつてのはどこの家のことだね。」

とたずねました。

「うん、どこでもいゝ、味噌をくれる家でさえありや。その代り、手紙には宛名は書かないで置いた。どこにでも置いて來なさい。そうだ、手紙をよんで聞かせよう。

　ハイ、こんちは
　どうぞぞうすいのみそ
　一かき
　くだされたくそうろう
　　ハイさようなら。

「いゝか、わかつたかの。」

こどもたちは、さつそく、その手紙を持つて味噌を貰いに行きました。

その手紙は今でもある家に大切にしてとつてあります。

良寛さまの字

良寛さまは字がたいそう上手でしたから、あちらからも、こちらからも、
「良寛さま、掛物を書いてください。」
「良寛さま、額の字を書いてください。」
といつて頼む人が、たくさんありました。
しかし、良寛さまは、たいがいの人に、
「まだ〳〵、もう少し手習いして上手になつてから書いてあげよう。」とい

つて、じたいしました。
それでもこどもが頼みますと、良寛さまは「うん、よし〱。」といつてよく書いてやりました。
ある日、良寛さまがある村のある家をたずねますと、その家の主人は前からどうかして良寛さまに字を書いて貰いたいと思つていたものですから、さつそく良寛さまを奥の座敷に案内しました。そして戸という戸をみんな外から固くしめて、どうしても出ることができないようにして置いて、外からいゝました。
「良寛さま、きようというきようはどうしても字を書いて貰わなくてはなりません。もしあなたがそれをいやだとおつしやるなら、いつまでもこうして置きますぞ。」

良寛さまは、これには困つてしまいました。そこで、
「いや、書きます〳〵。いくらでも書きますから、書いたら外へ出してください。」と頼みました。

主人はさつそく紙と筆と硯と墨とを持つて來ました。良寛さまはかさねて主人に向つていゝました。
「書くから、どうか書いてしまうまであちらへ行つていてください。書くところを見られては困るから。」

主人はあちらへ行きました。良寛さまは幾枚も〳〵書きました。そして主人を呼んで、
「こゝにちやんと書いて置きましたから、私が出て行つてしまうまで見ないでください。」こういつて大急ぎで帰つて行きました。

主人は良寛さまが出て行くのを待ちかねて座敷に來て見ました。ところが驚いたことには、どの紙にも〳〵、

「良寛こまる。」

「良寛こまる。」

と書いてありました

またある時のこと、ある人が良寛さまに掛物にするから二枚書いてもらいたいと願いました。そして、

「良寛さまの字はむつかしくて讀めないのが多いが、私にはすぐわかるような字を書いてください。」といゝました。

良寛さまは、さつそく、

「よし〳〵。」

といつて、一枚には、

「一二三」

いま一枚には、

「いろは」

と大きな字を書いてやりました。

またある時のこと、ある人が「これまでいくら頼んでも良寛さまは字を書いてくれないから、きようは一つ怒らして書かしてやろう。」と考えて、良寛さまに向い、

「良寛さま、あなたはこの頃字がだん〳〵下手におなりだという評判ですぜ。少しは気をつけなさい。」といゝました。

良寛さまはそんなことを聞いてもたいして怒りませんでした。それでも

いくらか気にかゝつたと見えて、
「そうですかね。わしはそんなはずはないと思つていますけれど。」といいました。
相手の人はこゝだと思つて、
「そんなら一つこれに書いて見せてください。」といいました。
良寛さまはうまくだまされたような様子で、頭をかきながら筆をとり上げ、
「薬はにがい。砂糖はあまい。」と書いて、さつさと逃げ出しました。
頼んだ人はあつけにとられてしまいました。

すり鉢(はち)一つ

ある人が良寛さまのおうちにたずねて行きますと、良寛さまはスリバチに水を入れて來て、これで足をお洗いなさいといいました。

その人は驚いて、

「良寛さま、これはスリバチではありませんか。」といいました。

良寛さまは平気な顔で、

「はい、それはスリバチです。」とこたえました。

「スリバチで足を洗うのはどうも……」といつて、その人はもじ〱して

いました。

良寛さまはそれを見て笑いながら、

「でも、わしのところには物を洗う器はそのスリバチだけしかありません。わしはそれで足を洗う、顔も洗う、味噌もする、食物も洗うのです。あなたも遠慮なさらずに、それで足を洗つて下さい。」といいました。

船頭の改心

あるところに、たいそう悪い渡舟の船頭がありました。けんかをしたり酒をのんであばれたり、人にめいわくをかけたりして、皆の人からひどく

きらわれていました。

ある時、良寛さまは、たくはつの途中、この渡舟に乗せてもらつて川を渡りました。すると川の中程で、舟がどうしたのかたいそうゆれ出しました。そして舟のゆれかたがあんまりひどかつたために、良寛さまはとう〳〵川の中へふり落されてしまいました。

良寛さまだとて泳ぎは知つていたのですが、おころもを着ているのでどうしても泳ぐことができません。そのため今にもおぼれそうになりました。

しかし、苦しい〳〵と思つてもがいているうちに、船頭が良寛さまを舟の上にひきあげてくれました。

良寛さまはたいそう喜んで、舟の板の上に坐つて、両手を合せて船頭を拝みました。

「ありがとうございました。わしはもう少しで死ぬところでした。よく助けてくださいました。あなたはわしの命の親です。あなたの御恩は一生忘れません。」こういつて良寛さまはなん度も〳〵船頭の前に頭を下げました。そうした良寛さまの様子をじつと見ていた船頭は、なにを思つたのか急に泣き出しました。そして良寛さまの前に坐つて頭を舟板にすりつけるほど丁寧(ていねい)におじぎをしていいました。

「良寛さま、私が悪うございました。実はあなたを川に落そうと舟をゆさぶつたのは、私がいたずらにしたことです。私はあなたをからかつて見るつもりでした。それだのに、あなたは少しも私の悪いことなんかに気がつかず、また私を少しも疑(うたが)いなんかなさらずに、かえつて私に礼をいつてくださいました。私はほんとうに恥(はず)かしくなりました。世の中にはあなたの

ような心の正直な、りつぱな方もあるのに、この私はどうしてこう悪い心を持つているのでしよう。きようというきよう、私は初めて自分の悪いことがわかりました。どうぞこれから時々あなたのところへまいりますから、私がりつぱな人間になりますように教えてください。お願いいたします。ああ、私はなんという悪人でしよう。」

こうして船頭は泣いて良寛さまにあやまりました。そしてその時から、前とはまるつきり違つた善い人になりました。

籠の小鳥

良寛さまは年よつて体が弱くなつたので、山から下りて島崎という村の木村元右衛門という家に置いてもらうことになりました。その頃のことです。ある日、良寛さまはたくはつに出て、ある家に立ちよりました。すると、その家の主人は、たいそうじまんそうに、窓のところにつるしてある鳥籠を指していいました。

「良寛さま、見てください。私のところのあの山雀はよく馴れているじゃありませんか。それはいろ〳〵な芸当をしますぜ。こんないゝ山雀は

めつたにあるもんじやありません。」

良寛さまはいわれるままにじつとそれを眺めていましたが、どうしたのか、良寛さまの目からポロリポロリと涙がこぼれ落ちるのでした。

それを見て主人は、

「良寛さま、どうかなさいましたか。」とたずねました。

しかし、良寛さまはなにも答えずに、いつまでも〳〵籠の中の小鳥ばかり見つめているのです。そして良寛さまの目からは、相変らず涙がホロホロこぼれ落ちるのでした。主人はます〳〵へんに思いました。

すると、良寛さまはふところから紙を出し、腰の矢立の筆（ふで）を持つてすらすらとなにか書いて主人の前に差出しました。そしてそのまゝ黙つて出て行つてしまいました。

主人は良寛さまを送り出してから、ます〳〵へんな気がして、紙に書いてある字を読んで見ました。それは歌でした。

おり〳〵はみ山のねぐらこいぬべし
　われも昔のおもほゆらくに

その歌の意味はざつとこうです。

「おお、かわいそうな小鳥よ。お前は今そんな風に小さな籠の中に入れられて、いろ〳〵な芸当をやつてはいるが、時々は山の巣のこいしいことがあるだろう。仲のいゝ友達のいるその山のおうちがこいしいだろう。わしもそうだ。こうしていま年がより体が弱くなつたために人の家に厄介になつてはいるが、時々はやつぱしお前と同じようにあの山の自分の家がこいしくなるのだ。」

おり〱はみ山のねぐらこいぬべし

　　われも昔のおもほゆらくに

主人はその歌をなん度も〱くりかえして読んでいましたが、
「わかつた、いや、私が悪かつたのだ。」

こう叫ぶかと思うと、つか〱と山雀の籠のところに行つて、いきなりその戸を明けてやりました。

とつぜん戸をあけられたので、山雀はしばらくためらつていましたが、やがて元気よく二声三声鳴いたかと思うと、パツと籠の外へ飛び出し、どこともなく飛んで行きました。

主人はさも〱嬉しそうにそれを眺めていました。そしていいました。
「かわいそうに、あのようにひろい世界にたのしく飛び廻つているものを

私は自分のなぐさみにこんな狭(せま)い籠(かご)の中に入れて置いたのだ。鳥にだつて親もあれば、兄弟も友だちもある。それを一羽だけつかまえて來てこんな狭い籠の中に入れて置くのだもの、鳥の方ではどんなに悲しいことがあるか知れない。しかし、私は今日までそれに気がつかなかつたのだ。それが今日良寛さまのおかげで初めてわかつた。ありがたいことだ。」

それからその人は小鳥を捕つたり、飼つたりすることを、すつかりやめてしまいました。

いたずらがき

ある金持の家で、その頃日本一の画家だという評判のあつた円山応挙という人に頼んで、絵をかいてもらいました。そのお礼が百両の大金だというので近所の村々の大評判になりました。

良寛さまはその家とは親しかつたので、どうかしてその絵が見たいと思いある日たずねて行きました。

その家の人達は、良寛さまのことですから、よろこんで見せてくれました。そればかりかその絵の掛物を床の間にかけた座敷に、その晩良寛さまの寝床をのべてくれました。それはゆつくりその絵を良寛さまに見てもらいたいためでした。

その絵はかわいらしい犬ころを五匹かいた、美しい絵でした。良寛さまは独でゆる〳〵その絵を見ているうちに、たまらなく愉快になりました。

そしていつの間にかその絵の上の明いたところに自分の好きな文句をわれ知らず書いてしまいました。

しかし、しばらくしてから、良寛さまは「これはとんでもないことをしてしまつた。」と思いました。そう思うと、もうじつとしていることができませんでした。

そこで夜のうちにこつそりその家を逃げ出して、自分のおうちへ帰りました。

あとでそれを見つけたその家の人達は、たいそう悲しみました。そして「せつかく百両も出して書いてもらつた絵を、あの糞坊主(くそぼうず)め、だいなしにしてしまつた。」皆がそういつて怒りました。

しかし、相手が良寛さまのことですから、その家の人達もしまいには「良

寛さまのことだもの、しかたがない。」といつてあきらめてしまいました。そしてその絵をそのまま倉の中にしまいこみました。

その絵の掛物はいまでもある家に、宝物になつています。しかも、いまではかえつて良寛さまの字が書いてあるので、掛物は一層貴く思われているのです。

戸をおさえる

ある日、良寛さまが、ある家に行きますと、主人ひとりきりでほかに誰もいませんでした。しかも、良寛さまの顔を見ると、主人はいいました。

「良寛さま、あなたはまあちようどいゝところへ來てくださいました。私

はいま急に用事ができて近所のある家まで行つて來なけりやならないんですが、あいにく家の者がみんないないので困つておりました。どうかあなたしばらく留守をしていてくださらんか。」

良寛さまは、さつそく、

「よし〳〵。」と承知しました。

主人が出て行きました。良寛さまはたゞ独ろばたに坐つてお茶をのんでいました。すると、しばらくしてから主人が帰つて來たらしい足音が聞えました。

良寛さまはなんと思つたのか、あわてて立ち上つて戸口のところへ行きました。そして外の戸を力いつぱいおさえました。そして主人をからかうつもりなのです。

ところが、主人の方がりこうです。こつそりうら口に廻つて、そこから内にはいり、ろばたに坐つて、だまつて良寛さまの様子を見物していました。
　そんなことに気のつかない良寛さまは、やはり一生けんめいに表の戸をおさえているのです。それをうしろから眺めていた主人は、おかしくて〳〵たまりませんでしたが、吹き出すのをこらえていつまでも〳〵見ていました。しかし、あんまりながいこと良寛さまが、力を入れて戸をおさえているのが気の毒になつたので、主人は笑いながら声をかけました。
「良寛さま、ごくろうですね。」
　良寛さまはびつくりして後をふりむきました。そして主人がいつのまにかチヤンとろばたに來て坐つているので、
「これは不思議（ふしぎ）だ、お前さまいつのまに忍術（にんじゆつ）なんか習いました。」といつて

頭をかきながら上つて來ました。

主人は良寛さまのあんまり正直なのに、つくぐ〱感心しました。

良寛さまと百姓（ひやくしよう）

良寛さまの歌に、

この頃は早苗（さなえ）とるらしわが庵（いお）は
　形（かた）を絵にかき手向（たむけ）こそすれ

というのがあります。これは一たいどういうことでしようか。

まずその歌の意味だけをざつとお話して見ましよう。

「ああ、いつの間にかもう田植をする時節になつた。この頃はあつちの村でも、こつちの村でも、みんな田植をするのに忙しく働いていることであろう。御苦労なことだ。ありがたいことだ。それで私のところではその田植の有様を絵に書いて、それを床の間にかけて、それを仏さまと同じように拝んでいる。そして『このようなお前さま方の働きのおかげで私達はこうやつてお米を食べさせてもらつています。ありがとうございます。』とお礼をいつたり、それからまた『どうぞ今年も稲が立派に育ちますように、そしてよく実のりますように。』と仏さまにお願いしたりしている。」

こういうのです。

この歌だけでもわかるように、良寛さまは毎年農家の忙しい頃になると

村の人達の一所けんめいに働いている有様を絵にかいて、それを壁にかけて、仏さまと同じようにその前でお経を読んだり、拝んだりしていました。つまり良寛さまは、百姓の仕事を仏さまと同じようにたつとんでいたのです。

「何がたつといといつて、百姓の仕事ほどたつといものはない。そのおかげで私達はみんなこうして養つてもらつている。百姓の仕事をしんけん、いにしてくれる人がなかつたら、日本の人間はみんな餓死してしまわなくてはならない。そう思うと百姓は、仏さまと同じだ。百姓こそ本当に日本の国の宝だ。」

良寛さまは、いつもそういつては、村の人達をたつとんでいました。

「良寛さまこそ本当に仏さまです。良寛さまほど立派な心を持つた人はあ

りません。私たちのような心の曲りやすい者は、良寛さまのようにえらいお方に教えていたゞかなければ、どんなに悪くなるかも知れたものでありません。」

村の人たちはそういつては、良寛さまを仏さまのようにうやまつていましたが、良寛さまの方では、

「いえ〳〵、そうではない。お前さまたちの心こそ本当に仏さまと同じだ。お前さまたちがそのように一所けんめい働いてくださるおかげで、私たちは生きさせてもらつているのじや。たつといことじや、ありがたいことじや。」

こういつては、村人達を拝むのでした。

いつも良寛さまのこういう言葉を聞いていた村の人達は、ます〳〵良寛

さまをえらいと思いました。それとともに、自分たちの仕事のほんとうに大切なことも深く考えるようになりました。

「私たちの仕事も、良寛さまさえあんなにいつてくださるのだもの、ほんとうに大事にしなくてはならない。たつとい仕事だ。ぐず〳〵してはおられん。しんけんに働かなくてはならない。」

こうして良寛さまの言葉と行いに励まされて、村々の人たちはだん〳〵いい人になつて行きました。

　あんまり日でりや雨がながく続いたり、あんまりわるい風が吹いたりすると良寛さまは仏さまの前に「どうぞ田んぼや畑の物にさわりのありませんように。」と一しんに祈りました。村の人たちはそれを見ると、

「良寛さまのようなえらいお方があのように仏さまにお頼みしてくださる

のだもの。」
といつて、元気を出しては働きました。
こうして良寛さまも、良寛さまを知つている村の人たちも、みんなしあわせでした。

おしまい

どんなえらい人でも死ぬ時がくれば死ななければなりません。天保二年正月六日、良寛さまは越後の国三島郡島崎村の木村元右衛門という家の屋敷の隈に建ててあつた小さな離れの中で亡くなりました。年は七十五でし

た。

お葬いはそれから四日目に行われました。何百人というおおぜいの人があちこちから集つて來て、みんな良寛さまの亡くなつたことを悲しんで泣きました。ずいぶん遠いところから來た人もありました。

あちらの町、こちらの村で、良寛さまと遊んだことのあるおおぜいのこどもたちは、良寛さまの亡くなつたことを聞いて悲しみました。

「ああ、もうこれから春が來ても、あの良寛さまがお見えにならないのかなあ。」

こどもたちはみんなそういつてさびしがりました。

良寛さまのお墓は、やはり島崎という村の隆泉寺というお寺にあります。お墓のそばには櫻の木が植えてあります。そして毎年春が來るとその櫻の

花びらがお墓の上に散りかゝつています。

良寛さまは、亡くなる四五日前に、これが弟子たちにのこすかたみだといつて、

かたみとて何かのこさむ春は花
　夏ほとゝぎす秋はもみじば

という歌をよみました。

その意味は、「私が死んでしまへばなに一つかたみとして残るような物はない。しかし、私が死んでも、春が來れば花が咲こう。夏が來ればほとゝぎすが鳴こう。そして秋が來れば木の葉が美しい色に染まるだろう。

それが私のかたみだ。どうか春になつて花が咲いたら、その花を私だとおもつて見てくれ。夏になつてほとゝぎすが鳴いたら、そのほとゝぎすを

私だと思つてくれ。また秋になつて木の葉が赤く染まつたら、その紅葉を私だと思つて眺めてくれ。」というのです。

そう思うと、良寛さまは、いつまでもいつまでも生きておいでになるのです。つまり春の花を見、夏のほとゝぎすを聞き、秋のもみじを見る度に私たちは良寛さまにおあいしているのです。

良寛さまのお生れになつた越後出雲崎の橘屋という家は今ありませんがその家のあつたところに、良寛堂というお堂が建てられています。お堂のうら庭のがけ下がすぐ海で、海のむこうに佐渡の島がほんのりと見えています。お堂の中に良寛さまの、

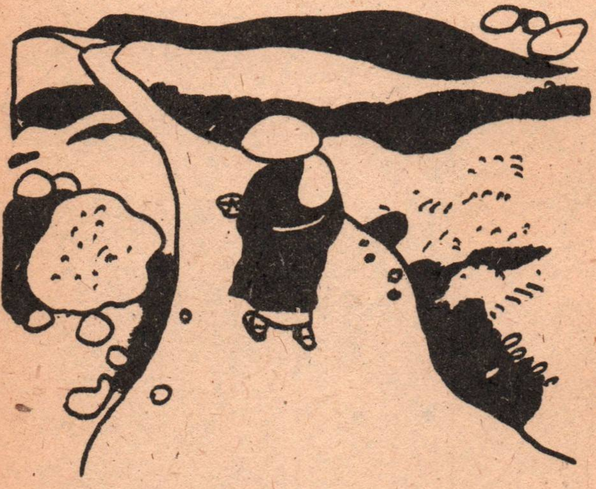
いにしえにかわらぬものはありそ海と
むかいに見ゆる佐渡の島なり

すなわち「昔も今もかわらないものはこの海と、海のむこうに見える佐渡の島だなあ。」という意味の歌が良寛さまのお書きになつた字のまゝ、石にきざんで納めてあります。

良寛堂の庭がひろいので、いつ行つて見てもおおぜいのこどもが遊んでいます。なによりもこどもと遊ぶことの好きであつた良寛さまがおいでになつたら、どんなにかおよろこびになることでしよう。

——おわり——

童　謠



童謡

しあん顔

良寛さま
あそびましょう
町を通れば
こどもが誘（さそ）う。

良寛さま
てん毬（まり）つこう

村を通れば
こどもがせがむ。

野には菫(すみれ)の
花ざかり
山にや櫻(さくら)の
花ざかり。

花は見たいし
毬つきたいし
食べるお米も

貰わにゃならぬ。

さてどうしようと
道ばたの
石に腰かけ
思案がお。

チラホラリと
花ちる下で
良寛さまは
しあん顔。

良寛さまのいけどり

そら引け
やれ引け
良寛さまの
お通りじや。

そら押せ
やれ押せ

良寛さまの
お通りじゃ。
帯にとおした
わらなわを
前でこどもが
ひつぱれば
良寛さまは
ヨーロヨロ。
腰に手をあて

うしろから
エーヤとこどもが
押し出せば
良寛さまは
ヒヨーコヒヨコ。

そら引け
やれ押せ
ヨロヨロ、ヒヨコヒヨコ。
良寛さまの
おでましじや

みんな來い
あつまれ
良寛さまの
おでましじや。

春が來たとて
山から下りりや
すぐに見つけられ
こどものとりこ
逃がすものかと
良寛さまは

とうとうなわまで
かけられた。

鉢の子忘れた

忘れた〱
鉢の子わすれた
だいじなだいじな
鉄鉢わすれた。

どこに置いて來た
さて、困つた

中にや銭がある
米もある。

銭もお米も
いらないけれど
かわい鉢の子
いとしゆうてならぬ。

すみれ、たんぽぽ
両手に持つて
良寛さま野原で

なみだ顔。

竹の子のびろ

「竹の子のびろ！
天までのびろ！
まつすぐにのびろ！
まがらずのびろ！」

えん板やゝぶり
畳(たゝみ)をやぶり

お部屋の中に
伸ばしてやつた
竹の子ながめて
良寛さまは
きようもひとりで
につこにこ。

「竹の子のびろ！
まつすぐにのびろ！
どこまでものびろ！
屋根でもなんでも

破つてやるぞ！
えんりよをせずに
ずん〲のびろ！

山のおうちの
ひとり住み
さびしい夜も
これからは
いゝ友だちが
できたぞと
竹の子ながめて

良寛さまは
きょうもひとりで
にっこにこ。

かや釣り

蚊帳(かや)は釣(つ)つたが
蚊がかわいそと
良寛さま片足
かやの外。

いかに良寛さまでも
蚊がさしやいたい

いたい〳〵と
蚊帳の中。

チクリチクリと
蚊の刺すたびに
良寛さまヒクヒク
蚊帳の中。

かわいそうだが
ゆるしてくれと
良寛さま片足。

ひつこめた。

良寛さまのおひるね

「良寛さま〱……
呼んでも呼んでも
返事がない
あんまりつん〱
しなさんな
おむこさんでも
もらつたのか。」

良寛さまは
寺の縁（えん）
まるい柱に
よりかゝり
コックリ、コックリ
おひるねだ。
……

「お花も來い
お雪も來い
おひなも來い

ホレ、一二の三
良寛さま
良寛さま
良寛さま
良寛さま
呼んでも〳〵
返事がない
あんまりつん〳〵
しなさんな
おむこさんでも
もらつたのか。」

呼んでも〱
良寛さまは
しらん顔して
おひるねだ
コックリ、コックリ
おひるねだ。

太鼓の音

トントコトントコ
トントコトン
今夜もどこかで
盆踊り
太鼓が遠くで
鳴つている。

良寛さまは
たゞひとり
山のおうちで
月を見る
山は松風
滝(たき)の音。

トントコトントンコ
トントコトン
良寛さまは
たゞひとり

遠くの太鼓の
音を聞く。

月夜の、月夜の
盆踊り
村はたのしい
あそび時
山は松風
滝のおと。

トントコトントコ

トントコトン
踊りの太鼓は
まだやまぬ
夜ふけのお山の
風やさむい。

空に字を書く

朝の手習い
良寛さまは
空一ぱいに
「い」の字を書いた。
「ろ」の字「は」の字も
つぎ〳〵書いた。

いくら書いても
よごれぬ草紙(そうし)
空の草紙は
ひろくてよいと
良寛さまは
お手習い。

秋の朝空
からりと晴れりや
ピヨロピヨロと
鳶(とび)が鳴く

鳶も字を書く
○(まる)を書く。

日くれ道

ひろい野原に
日がくれる
ひろい野はらの
ほそい道
良寛さまは
たゞひとり。

おてゝに持つた
鉢の子の
中でチヤラチヤラ
銭が鳴る
山のお寺にや
鍾が鳴る。

背中にしよつた
貰い米
袋は重し
道や遠し、

日ぐれの風は
まだ寒い。

山のふもとの
杉林
ホウホウふくろが
鳴き出した
たんぼの蛙(かえる)も
鳴き出した。

ひろい野中の

日ぐれ道
良寛さまは
たゞひとり
山のおうちへ
たゞひとり。

冬ごもり

雪がつもれば
だあれも來ない
山のおうちは
雪のそこ。

日がな一にち
ろに火を焚(た)いて

良寛さまは
冬ごもり。

本を読(よ)んだり
歌作つたり
良寛さまは
ひとりぼち。

雪はふる〳〵
昨日(きのふ)も今日も
春の來るのは

まだ遠い。

毬(まり)ひろい

ひふみよ、いむな
こゝの、とう
十とおさめて
また一二三
トントン毬(まり)つく
寺の縁(えん)
良寛さまに

花がちる。

花がちる〱
毬やはずむ
良寛さまは
じまん顔
ひふみよ、いむな
こゝの、とう
十とおさめて
じまん顔。

ひふみよ、いむな
この寺の
お小僧さんは
毬（まり）が下手（へた）
トトトントンの
トントコトン
良寛さまは
毬ひろい
地べたをはいはい
毬ひろい。

鬼ごっこ

ころんだ、ころんだ
和尚（おしょう）さまがころんだ
石原でころんだ
石が腹たつ
和尚さま笑う〳〵。

石につまづいて

ころんだまねして
起きてアハハと
笑つて見せて
きようも良寛さま
お宮の森で
こどもあつめて
鬼(おに)ごつこ。

ころんだ、ころんだ
良寛さまがころんだ
ころぶまねして

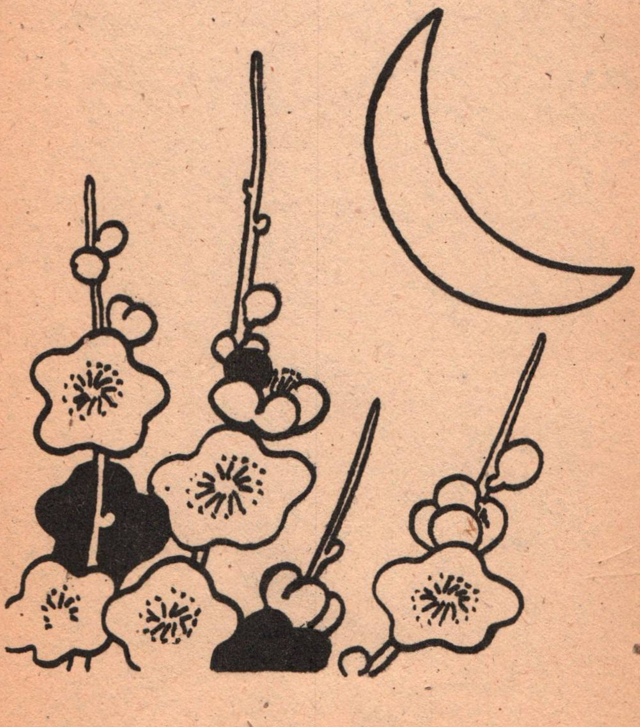
ひざすりむいて
アイタ、アイタと
逃げよとしたが
良寛さまとうとう
つかまつた。

鬼だ、鬼だ
良寛さまが鬼だ
逃げろ〳〵と
こどもたちや逃げる
鬼になつても

良寛さまは
ニコリニコニコ
ほとけ顔。

春の日ながも
いつの間にか暮れて
空にほのかな
六日月（むいかづき）。

良寛さまの歌



良寛さまの歌（うた）

春

なにごともうつりのみゆく世の中に花は昔の春にかわらず

ひさかたの雲いの上に鳴くひばり今を春べと籠ぬちになく

なにとなく心さやぎてねむられずあしたは春のはじめと思えば」

あしびきのこの山里の夕月夜ほのかに見るは梅の花かも

うぐいすのはつ音はきようとわがいえば君は昨日(きのう)というぞくやしき

心あらばたずねて來ませうぐいすの木伝(きづた)いちらす梅の花見に

眞垣(まがき)ごし庭にはぶりて雞(かけ)は鳴くわれ鶯(うぐいす)におとらましやと

うぐいすの声をきゝつるあしたより春の心になりにけるかな

薪(たきぎ)こりこの山かげに斧(おの)とりていくたびかきく鶯の声

いざこども山べに行かむ櫻見にあすともいわば散りもこそせめ

むらぎもの心はなぎぬ春の日に鳥のむらがりあそぶを見れば

山里に櫻かざして思うどちあそぶ春日は暮れずともよし

この宮の森の木したにこどもらとあそぶ春日はくれずともよし

うつそみの人もすさめぬ深山木も春には花の咲くちようものを

鳥はなく木々の梢(こずゑ)に花はさくわれもうき世にいざ交(まじ)りなむ

春の野にさけるすみれを手につみてわがふるさとをおもほゆるかな

つぼすみれ咲くなる野べになくひばり聞けどもあかずながき春日に

道のべにすみれつみつゝ鉢の子をわすれてぞ來しあわれ鉢の子

道のべに菫(すみれ)つみつゝ鉢の子をわが忘るれど取る人もなし

鉢の子にすみれたんぽぽこきまぜて三世(みよ)の仏(ほとけ)にたてまつりてん

飯乞うとわが來しかども春の野にすみれつみつゝ時をへにけり

こどもらと手たずさわりて春の野に若菜をつめばたのしくもあるか

去年の秋虫の音聞きに來し野べに若菜つみつゝ帰る今日かも

この里に手まりつきつゝこどもらと遊ぶ春日はくれずともよし

かすみ立つながき春日にこどもらとあそぶ春日は樂しくあるかな

山吹の花のさかりにわが來れば蛙なくなりこの川のべに

草の庵に足さしのべて小山田の山田のかわず聞くがたのしさ

もゝ鳥の鳴く山里はいつしかも蛙の声となりにけるかも

あずさゆみ春の山べにこどもらとつみしかたこをたべば如何あらむ

あずさ弓春になりなば草の庵をとくといでましあいたきものを

歌やよまむ手まりやつかむ野にや出む心一つをさだめかねつも

ひさかたの雨のはれまに出て見れば青みわたりぬ四方(よも)の山々

夏

あいつれて旅かしつらむほとゝぎすねむのちるまで声のせざるは

夏山をこえてなくなるほとゝぎす声のはるけきこのゆうべかも

ほとゝぎすいたくな鳴きそさらでだに草のいおりはさびしきものを

国上山まつ風すゞし越え來れば山ほとゝぎすおちこちに鳴く

手もたゆく植うる山田のおとめ子がうたうたさえやゝあわれなり

この頃は早苗とるらしわが庵は形を絵にかき手向けこそすれ

さみだれのはれまにいでてながむれば青田すゞしく風わたるなり

あしびきの山田のおじが日ねもすにいゆきかえらひ水運ぶ見ゆ

われさえも心もとなし小山田の山田の苗のしおるゝ見れば

夏草はこゝろのまゝにしげりけりわれいおりせんこれのいおりに

秋

わがまちし秋は來ぬらしこのゆうべ草むらごとに虫の声する

秋もやゝ夜さむになりぬわがかどにつづれさせちよう虫のこえする

秋もやゝころもでさむくなりにけり草のいおりをいざとざしてむ

秋もやゝうらさびしくぞなりにけるいざ帰りてむ草のいおりに

秋もやゝうらさびしくぞなりにける小笹(おざさ)に雨のそゝぐをきけば

さびしさに草のいおりをいでて見れば稲葉(いなば)うごかし秋風ぞふく

秋さめの日に〳〵ふるにあしびきの山田のおじは晩稲(おくて)刈(か)るらん

秋の雨の晴れまにいでて子どもらと山路たどれば裳のすそぬれぬ

ふるさとをはるばるいでて武藏野のくまなき月をひとり見るかな

ひさかたの雲のあなたに住む人は常にさやけき月を見るらむ

あしびきの国上の山の松かげにあらわれいずる月のさやけさ

風になびく尾花が上におく露の玉と見しまにかつ消えにけり

秋の野をわがわけ來れば朝霧にぬれつゝ立てりおみなえしの花

秋風の日に〱さむくなるなべにともしくなりぬきり〲すのこえ

水やくまむたきぎやこらむ菜やつまむ秋の時雨のふらぬその間に

月よみの光をまちてかえりませ山路は栗のいがのおおきに

月よみの光を待ちてかえりませ君が家路はとおからなくに

飯乞うと我このやどに過ぎしかば萩のさかりにあいにけるかも

ゆく秋のあわれを誰にかたらましあかざ籠にみてかえる夕ぐれ

秋山をわが越え來れば玉ぼこの道も照るまでもみじしにけり

あしびきの山のもみじ葉ちりすぎてうらさびしくもなりにけるかな

山里はうらさびしくぞなりにける木々のこずえの散りゆく見れば

夕ぐれに国上の山をこえ來ればころもでさむし木の葉ちりつゝ

夕ぎりにおちの山べはうずもれぬ杉立つやどにかえるさの道

冬

山かげの草のいおりはいとさむし柴をたきつゝ夜をあかしてん

草のいおにねざめてきけばあしびきの岩根におつるたきつせの音

いかにして君いますらむこのごろの雪げの風の日々にさむきに

石瀬なる田中にたてる一つ松しぐれの雨にぬれつゝ立てり

飯乞うと里にもいでずこの頃はしぐれの雨の間なくし降れば

はら〳〵と降るは木の葉のしぐれにて雨をけさ聞く山里のいお

草のいおにねざめてきけばひさかたのあられとばしるくれ竹の上に

よもすがら草のいおりにわれおれば杉の葉しぬぎあられふるなり

飯こうと里にもいでずなりにけり昨日も今日も雪のふれゝば

山かげのまきの板屋に音はせねど雪のふる日はさむくこそあれ

白雪の日ごとにふればわが宿はたずぬる人のあとさえぞなき

今よりはつぎて白ゆきつもらまし道ふみわけて誰かとうべき

さま〴〵の歌

今よりはいくつぬればか春は來む月日よみつゝ待たぬ日はなし

草まくら夜ごとにかわるやどりにもむすぶはおなじ古さとのゆめ（旅にて）

よしや君いかなる旅の末にてもわすれたまうな人のなさけを（旅に行く人に）

のみしらみ音（ね）になく秋の虫ならばわがふところはむさしのの原

世の中に同じ心の人もがな草のいおりに一夜（ひとよ）かたらむ

山かげのいわまをつたう苔（こけ）水のかすかにわれはすみわたるかも

こいしくばたずねて來ませわが宿は越の山もとたどり〳〵に

いざこゝにわが身は老いんあしびきの国上の山の松の下いお

わびぬれど心はすめり草のいおひと日〳〵を送るばかりに

事たらぬ身とは思わじ柴の戸に月もありけり花もありけり

里べには笛やたいこの音すなりみ山はさわに松の音して

夕ぐれの岡の松の木人ならば昔の事もとわましものを

鳥とおもいてな打ちたまいそ御園生(みそのふ)の海棠(かいどう)の実をはみに來たらば

たらちねの母がみくにと朝夕に佐渡が島べをうち見つるかも

いにしえにかわらぬものは荒磯海(ありそみ)とむかいに見ゆる佐渡の島なり

天(あ)も水もひとつに見ゆる海の上(え)に浮かびいでたる佐渡がしま山

いかにせば誠(まこと)の道にかなわめと一えにおもえねてもさめても

いかにしてまことの道にかないなむ千とせの中の一日(ひとひ)なりとも

人の身はならわしものぞこどもらをよく教えてよねぎらいまして

人の身はならわしものぞことさらによく教えてよさきくいまして

かたみとて何かのこさむ春は花夏ほとゝぎす秋はもみじば

良寛さま

定価一二〇円

昭和二十三年十月二十五日 印刷
昭和二十三年十月三十日 発行

著者 相馬御風

発行者 梅山紀
東京都中央区銀座西一ノ三

印刷者 小坂孟
新宿区市谷加賀町一ノ一二

印刷所 大日本印刷株式会社
新宿区市谷加賀町一ノ一二

配給元 日本出版配給株式会社
東京都千代田区淡路町二ノ九

発行所 実業之日本社
東京都中央区銀座西一ノ三
会員番号A一一二〇〇五号
振替東京三二六番

（小原製本）